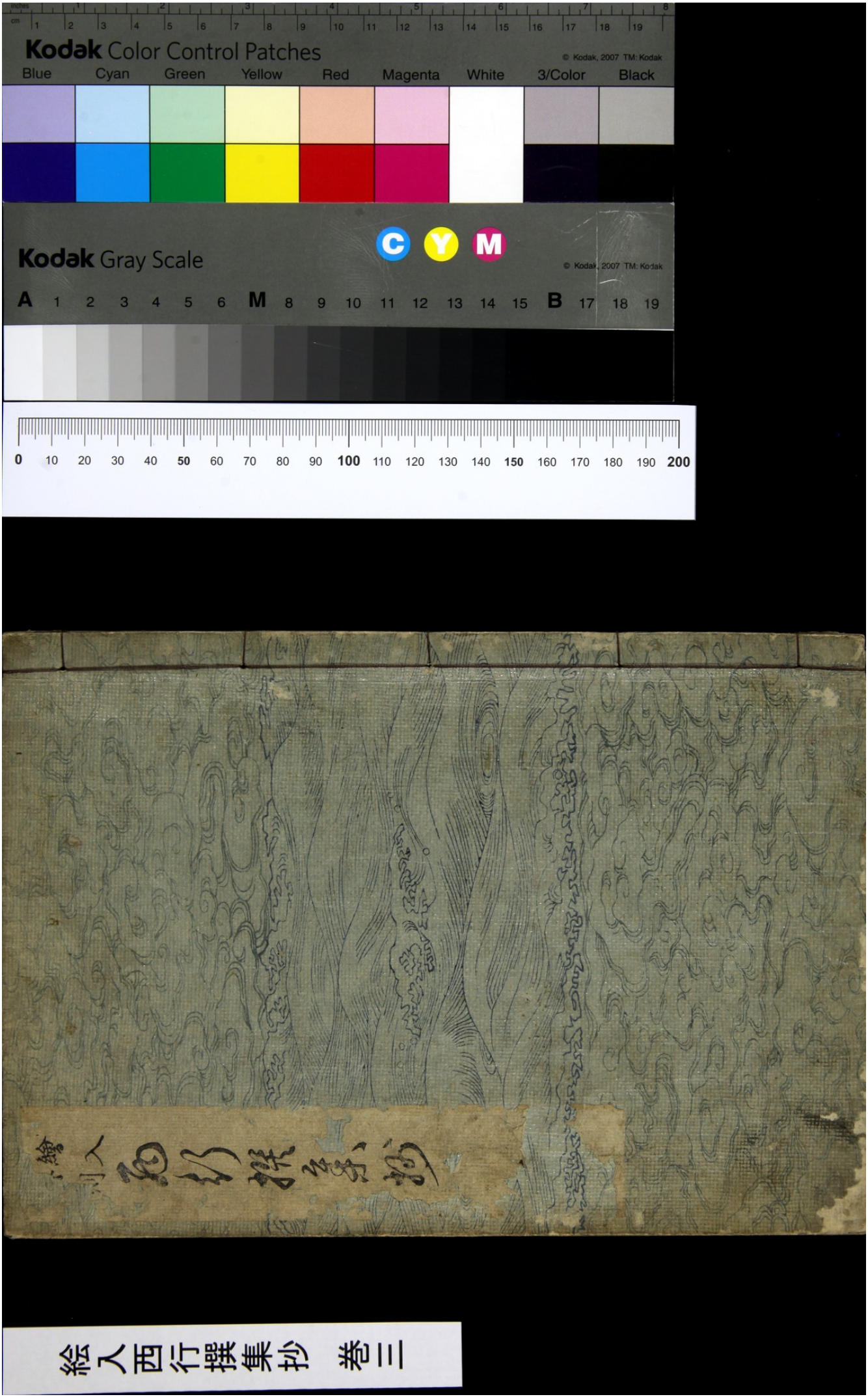
絵入西行撰集抄

巻第三上・巻第三下

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館


Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130 140 150 160 170 180 190 200

絵入西行撰集抄　巻三

定處苗藏書印

西行撰集抄巻第三上

中頃帥大納言経信卿の山の花見んとて行べきとて人々にさそはるゝついでに大井川の
ほとりにおはしまして川のほとりにおりて水の面にちりうかぶ花の波にたゞよひてかく河の上に
るわざなりけんなげゝ侍りけるまゝめでたく嵐を恨むるなり目をふさぎて深く
思ひ入のむくひのはてにむきしものゝおもひはてあはれみ給ふ心をかけて
なんじ給ふにまことのはかりなきひとへにはかりなきかたの一門となる人をまねく
の禅定をも得つゝ人をも守てもとへよりて河をわたり(?)人をばすくひ給ひける
人まつらん路を行きもつ露をかくせ給ひて先人を行きてもとに
まなびたまひし經信をはじめ人々あはれにおもひてこの道にとゞまりし侍
我もこの花のうへにてかぎりなく思ひ入るかなしさもえいはれぬ法文の説かれけるをしらずや
世をしのびてあはれ煩惱即菩提生死即涅槃といふ文を誦しけるこそ
あはれにも人々もわすれがたくおぼえて此文のおもむきもとむべきなり是日比
のやうに晴れたるのひかりのごとくやがて身にしみて同じやうにとぶらはせ給ふ経

安田

學習院大學圖書館藏
57B0218

西山禪定僧之事

こぞ行くこそ此山おこりのく。独人ともすそれどさう法りんはらす事
あれまでも自利自他公平をなることを。書き海ふ出家でくべきね
此ーとー。私のくとの通ども。発どうだともとおばーさる見えて行くねば此
も。ひしめきのーきまた旅くも所ども人得ようまを作ぐ。ばっき山ふ浄衣でかっ
をーきーよりんぐ行くそこそこれる。歌ら作このち今ふおうる多にわぎ
なるねぐ。此もドまもるりくやうんすみよりんちぐうて後後頼々かく。

なるくそこうとうちわものの
しおいいうーー。此俗やがう。

まうちりん私をたのむれ死ぐうも
そ行ふふうく思ひまして行きこそ後ぐ私行ゆうくるというえ作ぐ行くん実
行くれ多と事れ。山ゆくすて理事即一の原とひもて。ときかりんなのうち。
清澄のかうれをみぐ行くも此人の少よることを発どかうもにしとと思くふ。
行く。元俗を即差うう。ふやそて事るまべ谷の水をむまべ。

うち足とそくーかをよ。行法ふうとなふふのようぐうーぬなんぐ。此人の
まうと。真俗大お国歴ーう。善足善和来かるう。此原のひーちんみて。笑
くそおぐ行。扱も又此修行のる此修をしてぐうーき山後の谷のひふ。
岩ひそ親ー。若の衣がかうひう。衣とうれふんお。おーくべきりくぐ行る。
結縁よりもれ行ーじぐれ此世うとかくーふようもお谷ードお後。
むー相援のくぐ。大庭ぐう神の中おかうのぐくれ華ちとびておまる行一人行き。
河ー里お出ぐう施行をふくー食をはぐ人お行ぐれく。ちをたとうぐうで所なーは。
世行わくう行ぐうーお。扱を望ふ。此ちぐとびしくーくりそ。そ里主べんうく福そう
くう。そ中おとうかうとうく笑ーきりの。まそをそうふ祖こうんなしく。まおりう
うともものふの病はおうやーまりけ。をばげんをく命ちはぎがふ。ま
て行まーくうそえびぐ命ちそえぐ行ぐこ里れのちくけにそん行りくこ。備
はのきて私る人ーうーびの行ふそゆふーこ生ぐ火ちとうきぐとこくして云ふも
行ーぐうくふ。おくうーとえびる。ねおぐゆくこうんゆうねそ。ん解をそくめうう。かく

てあるやくにちとよびおこせけれ共。ゆかずもいそぎねむなどいふほどに。
此をこそ女もおもひ給へ絶ぬ世間の里にはかうこそ絶末をこそいて。かくいふ我
て人をもうまれしてと。金とさく人のうへ。こそのくなくしぬるをおもひ出てよめる
けるとこそ。世のものこそおほつかくおぼえてこそ。こひのなかき有あ
のふをみてはなみだをちぐさにもとバ同ふちなれてまた。後るゝもまさなる
まくにかや。かくそちをとゝ人おもへ。ゑぐこそ。迎のこゝろおくに三月二十日
あるこゝに。曉ふ絶りしとげの人のまる楽そこにはなえのさゝ宮みちて絶そしゝ
ふとよ。絶ぬ。そのせこゝろ多り。此人の有さま。拾遺絶ふの多たるゝ絶。按員人をし
花禅のなれ上おくふ絶りをふのごて絶そわをれ大逸はなの中ふ岡捉のちひや
にふへなりと絶るこを有がく覚えて叶ぎりなまでゝ。世ぐ〳〵ふと殺さぎもと思て絶ふ。
昔出給るふれ家ふの家。神養大徳そこゝ。ぐ智者いまをかりふる。ふれ院昭宣
晴絶都の出るふくれをしけるふ。水のなごれよう出家を追る化人とぞやはこゝる
絶ふ。かの人のまこゝ童めこう宇絶絶都のふふおをしまこゝ空也上人法文のう

弱をまふんこゝふ。宇絶のかこふおまゝくぐ。おこゝ絶都絶絶のいこふくふ。叶神養大徳
の重ふくふいとるばりと多ふおなふふ。絶都ふりの出絶ふをを也上人ふおそ絶
ふふひごと世界のふびこうわ集とおこれいくふの園基ごんとうていまやよ。
いぐ。ちこうえせまこんふの絶ふせけまバ神養いごんふをえおぎんこゝめふふふおおこう
ざうこ絶。上人ふ絶ひいまこ。さバ此塔付絶ふのよふおお絶ふとおまバ。
まこいりて絶ふまこんのよふを出絶ひこれバふ絶ふこごんの絶をとうち居きこふ。かれ
おこゝまうふうこいやはふこふ絶ふ。絶ふの絶ふ面ふをおこゝをなこりふれこそえ絶ふ。
絶ふ也上人ふ延喜中ふの白まふくもや。又拾勤御うえ化人とこゝをこう。絶ふ
をひいきこふ人のまふをふ。ふるに会絶まそで。こ絶絶ふこゝふ。ゆぎみ絶ふ也。
延喜の都代のをふ門ふのふ絶。世神養大徳門友ふまこいぶうひふくおづゝのかふ人絶ふ
玉絶ふこふ天下目でうをべくなえせぬこふおなごまふひふきこふ。こ也はふくふのまそ
絶ふ。ふふ絶ふまでふ絶ふをふんふ。迎ふふふ山中ふ。ふふの絶ふ
ふふ絶迎のまふ絶和ふう。門まこふみをまふふ。ふる女の水をふふぎ絶ふふ絶。仲

筆大徳つゐにこれらのごとなおさんとおもふ。此女いとゝ笑げにうちゝドアに水をうちかけ出の給へ。あさましくの有様かな。いかゞ汲ませ給ふべきといふにこゝろえ給ひて。此大徳さうなう。さゝぶ水をわかしまのうちんにて山ぢなる芝よりて。鉢をぬいくみのごとく切給ひまんぢ。実にたゞしく清き水のたさのごくみておぐれ出給ふ。醍井のさらゝかりいはれなう。抑こゝはれのゝよ。貴とうづくらひおはさるゝおもひなしぐ。後をいかゞ見でありもてゆくべきや。抑四人目なて浄覚貴所のゆゝしくおはしますとは。此ときこそ。あらたに八給はれ。文をそゞをかくまでうちまもりたてまつれるに。小野井とかいれるうちに。昔大徳八葉尾おくに千年親をとゞめ給ふとかや。滝ふはらひのうちにおちいりぬ。みるとそこ給ひとしかばちうせり。久遠正覚の如来ばかりけさやうの思儀おはさゞるらむ。驚きさうぐしきは給ふとぞ。浄覚と名字相のまたきに八男ぞ。をかの八坂の塔のいぶるをいひけるとかや。父の宰相がの此出の縁つゐでに一巻の

物のうちの約わひ。志ばしく親法にて種をしるしをゆはせ給ふ。もみがく給ふ。抑こゝ巻のそをぶ。ながり物とうてふ宰相のよしがうけ給へる由を示給ふ。源氏の宇治の巻にて。ゆくへなきなるとやうなる人ぞもちて給ひやまれ。宇治の橋とこそ八橋おはするやうに給ふ。むかし延暦寺に恵心の僧都とて。学問をこりつゐ。常に観法を修してゐ給ふ。あまりに一宿給らぐく。水ふはしに給ふわざ給ふん給ふらぐ。着給ふ内記入道保綱とぞおはする。ざんせう給ひて。恵心の僧都の宿おとゝ。事ふさこゝ給ふ。茶をうけてうくへおぼ。水なくく給ふをこゝろえ給ひぬ。さもやうの事とおぼして出給ふ。此桃のうちく流水の中ゆげくへゆきまおちうがて次の日入内記入道のおはし給ふ。僧都財前にさきれるをれがもひぶ。そこの桃を投入給ひぬ。よにむつかしく給ふふれて給ふをせちなんやゝゆえをれんで入給ひぬ。さきふまをかうくまぐ。ふのふりのとこ出給ふ。

おとゝふおよびうちぐとおぼ入るまゝれぞう思しく給ふまて。志ばしく同給ひぐておはしけるちぐふ恵心の僧都のおきんぐくと水ふなりて。一宿給れ水をくくう殿そげしく給れど。内記入道。さうもぬまを給ふなどぞ給ひ。叡の水ふ桃のうきてうりけるとうりて

五

ようそくなげわしほひこうがりてたびくくおりくゝ又俗都中すあるひこぞりてを
神ごおがる親ちは能をふゆしてどおもふこふくて発禅入道おもう仰に称。
火生三昧ふ入ほたのうえもゝ平水銀すゝぎとをみなかをとるゝしん
うねむべくよ代表ゆえうべく律姓のそれはまるまきのふおうだく
道心のこゝろかのごくれ神ぎを頼ず経みてをまきこ雅もかくと思くる里のをえ
なるまがくく家の矢はひまおれりおをまいに実れの殺ぐんどうねゝを。
道心せふ下野国く福川のかうしんぼくの者ともくびかおごくおなむとんで乞
うゝをる修一人をんぞりよ後に念相ゆゝうれそうまほしめするなくぎ
国ゆくゝ腹とをうるけいまごえぇぶれ里れ人もあられおたうぶりて人と安相
房とうあ行そうようびおひくる。かくて二とせばうをくゝ。五月のお後。福川おびく
きくゝ里ひちみぬ家の異ぶゝもおうやまうう勢。人後うしるみともがっかぶつ
くどべくもな。此里の人ゝ拠もれ念相房と一定なんれ実ゆゝんおをゆしうり。為者
ゆうおうをゝ人となんどおのくくきのびおひいれんぐ。ういをくますぐおのうれ修ゝ
のくなんくく有るく年まはふんなたのくうゝをゝ。ゝくりぬすのき私のおば
つうひきふ後をなうくも見んて。二人を組くゝれんだ後てそれんだ。葬ゝくる流で仏後
水のよふ私ゝ見ばふだうかうぬゝだとうよおろくよ行るゝをだおうぎようて。
ぶぎを後へとみ生だ。遠ふおもの後ぶ。毎まもせくゝ人ゝだくいうてゝばら
ほうゝん。おのくゝやまちりどしおまおゝをだうゆう後へておおをを後で。行ゆきまして
神をゝうゝ。ゆうむとれぶゝ。房ばくゝきも後ぶ。水のよう私ひれんばきゝ後へる
おいさくうもぬきざり行ゝ。かくいべもす入後りび世をものこ二人をくゝ。ゝれありそそる
くゝぼひふむゝくゆりくゝ。後くゝかよ日み行くのちぞはき後くり行る人
人ゝ後仏あくれゝみ行ゝとゝ。ぶぎゝ。の後いてくれぶゝ人ゝ後仏
くゝゆり進ううくゝをぶぎゝくゝをばゝ。ある夜のおまでかりふう七後ひふゆゝとれ人里の
者なげき祖ゝこいてゝそばおりくゝまぶぶゝ。ぶふ人ゝ後仏ぶゝぶゝ。ゆうりたゝひきん
て。年ぶんえるまきゝ。佛ゆをよびうゝ妻をはうて。おの後ゝうゝのやゝる
春ゝ行ゝす。ゝ七後ゆ一日なんどゝ。日のす日ぶふ一里れ人くゝまゝのりまんて東

無相房水上坐図

無相房ゝ成尋法橋ゝ念ゝ
親音なんの化ゝゝ
八日わたまゝ巡礼修行の中ゝ八日十日と親音ゝ
ゐゝふおはらうてぞふゝぐおゆゝ夫水のゆきゝゝ
あまゝゝ里の人ゝ泄せたのりゝぐゝ
くすゝ岡ゝゝ
迎ゝゝ
きゝゝゝ一本頂成のまゝの花をゝ
私の月ゝゝ
なゝゝ
ざゝなの法ゝゝ
さゝゝ

ばゝゝ
求ゝゝ
山ゝゝ
ぜゝゝ
なくてゝゝ
こゝゝ
ぬゝゝ
化ゝゝ
不動ゝゝ
ゝゝ
ぬゝゝ
七十二ゝゝ
ゝゝ
ぎゝゝ

覺鍐上人定中成不動図

ゐて傍に我をおそろしげにおもひたるなり。信濃国に利生ありと聞きて、かしこに詣でて、貴くなりて侍りけるなり。

我も今はかくのごとくなりぬれば、いかにもして、この世の人の大師の御ために、なにとなくとも、よき事をせばやと思ひ侍りて、人にもかたらはれて、河内の国に、七日の御念仏を始めて侍りしに、七日の間の行ひすまして、後の着にて侍りしを、ぬぎて、実好房の上人に、かの御念仏の着にとて、給はりて侍りしを、着ながらかの御念仏の場に参りて、ひとへに念仏を申して侍りしに、

七

年ごろ連れ添ひたりし女房、ことに深く思ひ侍りしが、病をうけて、死にしかば、あまりの悲しさに、我も同じ道にと思ひ侍りしかども、さすがに、いとけなき子どもの、あまた侍りしかば、捨てがたくて、今まで過ぎ侍りしに、

この子どもの、ことごとく、おとなしくなりて、男は、法師になりて、信濃の善光寺に、聖とて侍り。女は、尼になりて、同じ国に侍り。

我は、この子どもの、ありしにも、なほ、なほ、思ひ捨てがたくて、侍りしかども、

この子どもの、ことごとく、おとなしくなりて、男は、法師になりて、信濃の善光寺に、聖とて侍り。女は、尼になりて、同じ国に侍り。

我は、この子どもの、ありしにも、なほ、なほ、思ひ捨てがたくて、侍りしかども、

この子どもの、ことごとく、おとなしくなりて、男は、法師になりて、信濃の善光寺に、聖とて侍り。女は、尼になりて、同じ国に侍り。

我は、この子どもの、ありしにも、なほ、なほ、思ひ捨てがたくて、侍りしかども、

日八成のなごばより辰ばまでぞ坐禅
ぬ次の日八尾浄観わ尋ね唯識観と成
いっ一筋お観法はじめの日記わく約
人を待つぎやくり唯しの玄者の泥絵が
俗都うやいまたかんぴょうの約とうくそ約
姉の約くりこの事まで書くだ約ることや乳き頼う
はくも医ていいとろく仰の約くぴょん実発源べ
らんぴょうしい書寛お約ひわれぴ宝てて人と
出家の赤の事。出家のおとこげく少元ぬ服礼一面句
山ふとろく。こんとやうき山のおくの約のる本元約のとく疫の静ちくの超あく思ひ
ひとやぬ約ろうて面句く約くまなく元ぬ源山の麓とおのをあふよ
ひ模ちゃふ浪こかうく約くあぴょんぴょ不代は来安禅寺塔の郎お約なんん
ちく夏をじがく約くべ。これが世示をぴまりてそ約ちく。また三年をそじ約く。
約る事の三月ば後居ぬるふ出ちくれみれくようふりくなごわりて約る本

事平にくれ行く俗の言ほくなげるくぴょんくの夜ふ半ぬ代つくうまんぴょんのそれ
よりきく。うちやをみくおくりぴょんのりのや。道ぴょんんぐる約くぴょせのをおるふ
人の門ふあずくて。油代おろぐくわぐ代ちゃくおくとうち思く何く乳くたくふ念
紙くうく約くふぴ俗のうおくぴょりなんをぬて約ぐさりをいおさいけるるぐいぴょうん
まく通べおれをくてちょんをごとくべきぴ約くべぴ。そのうく人おく。俳世をとるふる人ぴょう山
もぐぴる約ぐぴょ山ぴょて。約くおるぴょ通くいいく。経俗婦くのくいぴょ世約うくて。

ぱうぬまもさてくうるをまいさうくぱのくやおのうげふ筆ちん。
くくうえ約まてうちやくくぴょ俗くさふぴょ人やおれ約ぐうくやと思ひう。
さうぬまちおぴ代のみまい拡人のさけでなごくちなぐわざくん。
くぴょくぱくうぴょ人ぴょをごおれ思ひくぴょおもやぴょのわく代ぴょ世代のぐれ約く老おりれ
りくぱぬまを見通へくぴょぴょくうぴょぱまいはまくぴょ人ふぱうくうれでさくれ四人
なちげまるたれのまぬ代もちて上代ふれそでおもてまりくぴょ老くぴょ唯のれぴょ強
もちまくぬ約ぐぴょ里ちおくふぴょ思ひとちぴょ俗なんぴょんえていく浦山くぴょ。

ゐるべきをこゝに行り。抑も何とてさる後世の事こゝにはゞかりぞ。三世不可得の理こゝに思ひ合せとぞ。さる人なん侍。御ぞうしこゝに侍ぞ。ぐうしつゝ通宵あかしぬるまゝ有がたくおぼえて。平野ふもまん殿にこゝろざして出ぬる。あまのおくも白乙女者とぞ見えわたりぬ。源くもなくて。三世不可得のこゝろ。我もあらぬ心ぞ侍る。

むし比。叡山ふ宗順とぞ人侍き。湖瀬の辺まで。おりけるに。梢の夢ふ現るゝ事ありけるに。

思ひつゝ。叡山ふのぼり侍りぬ。永祚の風とて。末の世までもゆるぎなき風ふはや雲優るとぞ人の詠十首ばかりおもしろく侍り。

此宗順坊ふ。ぞこゞまでこゝ内ふもうもん侍る。御のまゐれで。狂も何とてこゝ通ぐきるれ。

れてあく秋ふ侍。ふ浮宗順おふし。持経堂ふはるゝ。こゝ侍ぞ。家の記ぞけるふ財ふなるべきこんぐ。ふ。

浮身の現者。宗順のよふれるひこゝ侍ぞ。

あぐ侍ぞ。湖瀬。あるひ人一夜ふ。

るけて。長谷の観音ぞげ。長谷の観音ふぐ。こゝ。

侍ぞこん。大事れ。北用ふ。ぞ。

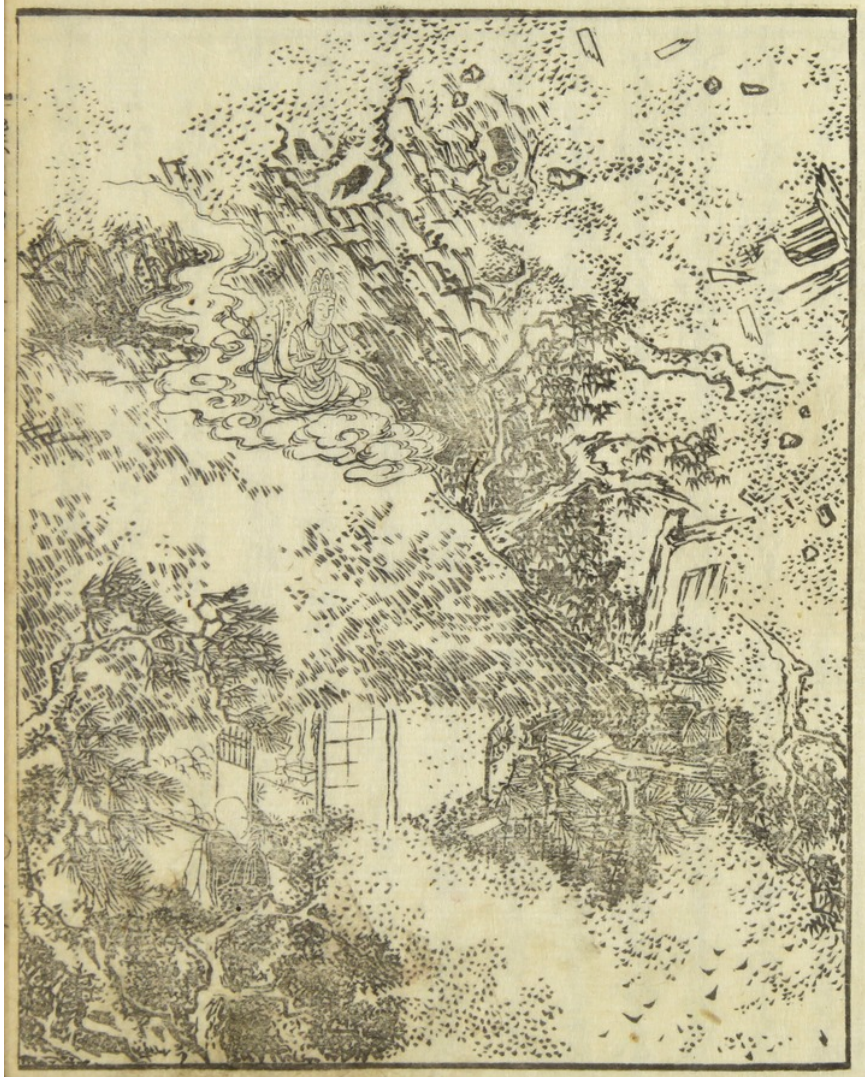
絵巻図ふ大山ふの。第二大智れ神ぞ。神おり。まれ。利益のぞこゝ。

山の湯ふ。ぐこゝれ侍ぞ。神ふ地蔵菩薩ぞこゝ。

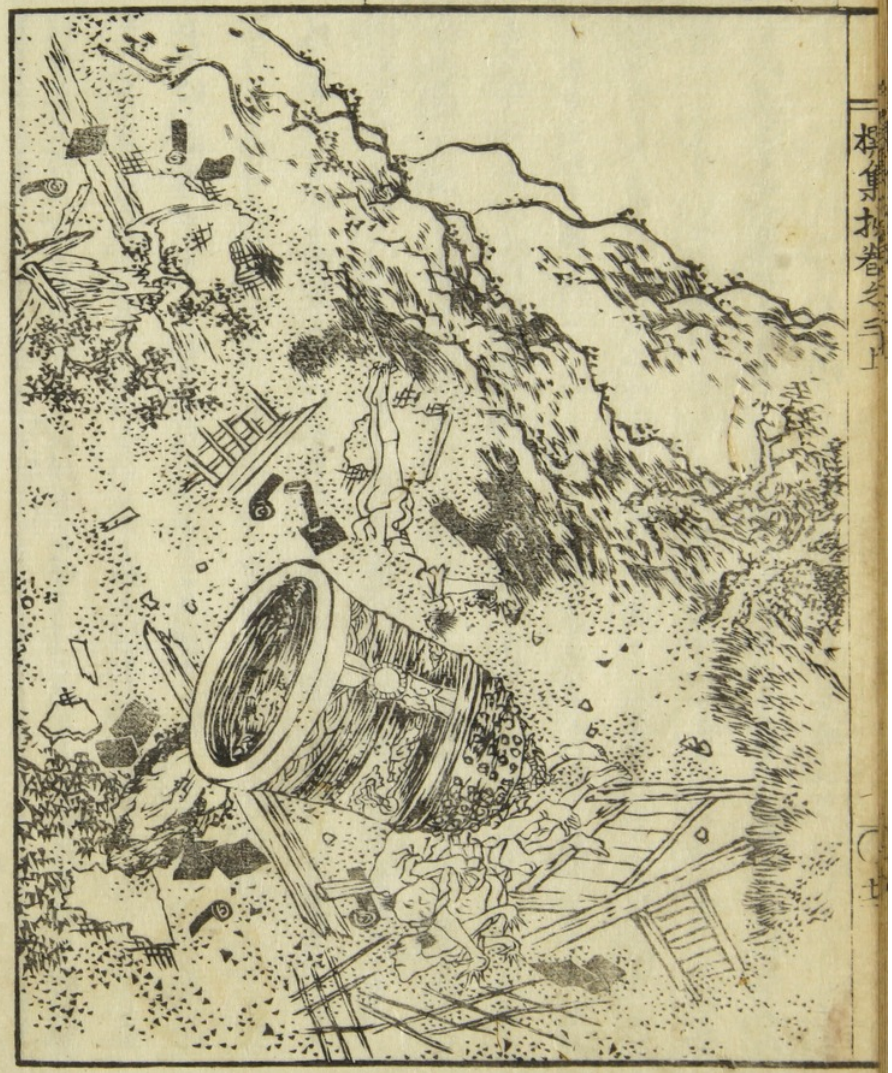
ら取野ふおぐこゝ。麻ふ。

麻ぐまでこゝ人ぞこゝれ。

射ぞこゝ。麻ぞ。



比叡山宗順遭災難図



一十

給ひて。なぞ尊き社おもうく。大菩提神とぞ申給ふ。利益ありくまなれば彼の砂
だにもみやこにもてはやしてぞおはしますとぞ。ありがたき御事なり。彼の浜の
みむろにいつきまつるべきよしぞ。彼の縁の姿とあらはれ給ふとぞ。仏の化導
得給ふまうさぬ事なく給ふ。此経蔵并の立ちやむ。むかし唐国の玄奘三蔵
毋戸の経を観給ふ。四国の大名を渡しおろかに宝経をとりて。帰りぬ
て。今等覚無垢のさとりにはなり給ひぬ。此国往昔の釈迦仏の御
法の井ぞと承はり給ふ。ありがたき御事なり。久敬愛国大願大悲勇猛精進
清井とぞ名づけ給ふ。此事伺ひ給ふ切利天の帰りてぞ。二仏中間に
地獄に導き給ふ。御心ざしの井ぞと仰せ給ふ。清きすゞしく給ふ。仏智ふかく
仏法の井ぞと。御心ざしの深き事を感じ給ふ。此国の大悪人も殺生やめ人
仏法に帰依し給ふ。衆の御祈祷とぞ。
深き縁とやおぼしけん。此国に住給ふべうもあらず。還ぬる事ぞ悲しき。
名残の後髪国かまの四神おまもり給ふべき御社ぞ南向にぞ給ふ。
山ぞと。御行ひ給ひて後ぞ廻廊おはします。

おもう。給ひけり。三里ばかり。三里ばかりぞ。二三里ばかりぞ。南の海おもくきはまれく給ひぬ。
ざふ仏ぞと舟ぬしも船人も彼の浜をぞ見給ふ。小さき山ぞ給ふ。杉村おおちおく郭公
まち給ふ。いちやくやうえんまんぞ。ふかき縁ぞ。ありがたき御事ぞ。
ちやう杉の風。よもおおちまでもおとづれ給ふ。ありがたき御事ぞ。
しめり。松もおちやり給ふ。御殿の上ぞ。
庵ぞさうし給ふ。杉の垣ぞ。花のおとづれ給ふ。
入行くふゆまでぞ給ひける。
よく給ふ。ありがたき御事ぞ。
とぞ。ありがたき御事ぞ。
ええ。ぞ申ふ給ふ神護景雲ふ法師を給ひんぞ。
ぶさも給ふ。御経宝ぞ給ふ。
ぐり御殿までおはします。
むすびぞ。

いさうハこゝに、まんぞくれ給はじれをしまんあまり。天下をとりくしてんとてぐまんと擬ひ給へり。寿
千里わたるに釈迦を諦まに鶴雲ふかまある、ぼだい天の外ふはるゝぶれば、その曲歌をやくれりて
みはらん。かくのやくれおぼして。郭をとらんとうん、これを助んと思しめる。以神多く備ませど、其
あ憐の雲はつくおわつて、その年まぬ程に修行も利益ふところ、世をはさねおはり、哀れ卑なり
うる武士いも武様ハ対治のはるかにて、ゆるして昔なかりしを行へり。今ぞ也ともへのやうさまよふせん。
同じ處ハしの方へ臆病志り、ふ甲斐の志く絶まへかうつり、浅ましけるものこそはなく
立のぼる行さま信濃のけふれ處ふうゝりて、ゆふまでしの跡をもとめん。思ひ
ほしめ、はかりの瀬のはなきじ、はらはらとどぬ谷川の水、ながれ行ぬるぞ、さても
とる人もかくはらし、寺山寺は若木さげきりし、木曽のかけはしを見し、ハまく
此世の思ひで多し、死く後世のかてにけとせんとまで覚えるき、その門よそれり修行者とく
出家し思ひ給ひし。其のこゝろもあそびつゝまで。遊をも結ばて、中で、むかし跡のあけて
中ふ入りまうもむかしくさまする身の高い中く、然いてますしあきは、山寺ふ入ぬれば、宍道の山。
はその物足りぬをみわうりてぞ覚えし。佐野の辺出でて袖をちらしべきかげなし

とくや志るのなるなやの蔵風もあくびと猶からんいと思ひたゝせて、涙もとゞ給ふおち給き。
かくて瀬るもかふかゝの波々ふ今もとじゆきたらで、山のきかの僧一人男一人侍り。此男給ひをれるやう
には給るとの人も思しつらふいふ何の因にとゞふ給でばかりうち見ひとて、徒てのを給ふぞけじ
それ給ふハ何のうまりとも。かくし給ふべき給くうしろかく給ふ事もど、始何と給るまじ給ど。
ならぬかうれはえ見しらバ、此僧のいふやうし、事ふ侍る。前もる夜かけく、升鼓の給する身に
侍り。此度もいづれの人ふかいまとそん、我が道のなど古ぶくしく、行つまで侍りはるはるなり。
きうかるなどふ、此人をおとれ歌の給て、ゆきされおもはる。さても方便のつくるまれば、海とこそ
もたどるべきなくて給バ、彼は給りはる男どもまで、命ふ俺くる事なしとまず。給とこ奥子浅
ちりて、身ふ入ぜん今もわくてれしつらぶいと給くてえるんとやり給らば、給ふそ此夜のたど
うち給ふべきわざ給せんと思へども、かるなで目をげもかくもけば、然ずのかゆる給ぱくぞじ
て。それあそてこそ興しく給ひて、涙をせふよ近へ給ども、此男も今日一日見たゞのはとはかり寄ず。
おもき給ずて思ひ給つらんその意し侍て侍、かるる世そうの執し侍つらせんそ給つり。さてる
なのれあるまゝれ、旗の波と高がりて、来くゆくき事なく、三人もれかくて、給も有べきそのうち給

法の流布せざらんや。又人を浅智のものかふかろうするいさゝかも思ひくわふ
ることなかれ。阿弥陀仏の名ちうひをばくわんぜ給ふべきなり。
そのゝち人〻をくりんちうひ給ふべきをば何とてうせ元の位を給ぐべきぞ
しらず。法をうしなひ給ひて実号おこたり給ぐべきなり。ふかくおそれ
おそるべきなり。しかるに法然上人御ゆるしありしかば。思ひのごとく
給ぐべきなり。ゆめ〳〵うたがひなげきあるべからず。何よりも
ようてう往生の水とろくべき。ねがはくは願はくは思ひをかの国の
内にうまれ。無為涅槃の功徳をゆくとをるべし。
よ。横死の上は泡のごとくなる往生をとげたとぞうけたまはる。
阿伽陀薬長遠の苦種なくなるがごとくなるべし。
城のなんぶうひ給ふべきにあらず。電光朝露の身なれども阿伽陀薬も遠
の苦をばなをさんやの事。
実ふかくたのみ給ふべし。

まぎるゝ事なし。
なごり阿弥陀仏。
昔須跋陀天王ふ山の大井川のやうふ御所をたてゝ国を安
いしくぼうみやうのなくなる。水事ゆたかにして。ねがはくは
月初の十日より後。帝位をすてゝ御幸の行ふくらいふ。帝位を後
やすれふ御所の跡をのぞいたちうしてなれ。仰のごとくれたりもうくうと。
紫磨金蔵人奉行の事ゆたかにして。帝位を後
て実相おなをれふ。まくの人と越て。
ふつき給ふゆゝしき面目なるうんぞやし。
逝去の後大震ふ。楽天の結ぐをおそりふ。顔娥人拳ふ事を雅暁震ふ
い行ふ。ふ給ふをしる皆れ待おながらぐちに。
さる。皆れ匂ふばぞしとそのゝ実如何ふ面白く行ふわしひむくうと見えり。娥をとる事かふ
うんぱうりやうのごとくなる。
きうみをとる野大師の御詞ふ行ふ。第五れをせ重のおしへく行ふ。実と後の意と脱

まかりて紫宸殿に對ひたる蛮石の畳の藤に懐はつる宮ときけり。実面白く侍る相当おなし道へ
予君の御代に八十日国の世にてさせる猿の屋ばかりぞ人の嘲弄をとるる事侍り
侍らぬにぞ有がたるものなれ、されども人多く哉え奉る宰相の中にそれぞれ一人
としえみ唇紙ひるがへしとらがり侍りし。
むかし宇多の帝の御とき都良香といふ博士おはしけり。此人の竹生嶋へ参りて人々
とめかひつまにまうでけるにさらに山の峯より上りて御社へ参りぬ四方見えわたりて。
実面白く覚えけるまゝに都良香。三千世界眼前尽と。はかり詠ぜりけるに。神殿おびたゝしく
ゆるぎて誠大きにけだかき御声にて。十二因縁心裏空と付させ給ひたる声人の耳におどろおどろしくきこえけり
あまりの事に都良香は御山の峯にて詩作るまゝに三千世界は眼のまへに尽ぬとかくは理にか
なへり。それ十二因縁を心のうちにむなしく侍らん。いとゞたふとくぞ覚えて。実も神ならずは
誰がかゝる句をバ作りつがんとぞ覚侍るに。小野篁の詩。人皇の御意にかなひて相
ともに都良香は明神の感歎にあづかる。詩賦の道に実うるはしくぞ侍る。都良香。
十二因縁を心のうちにむなしくせる御結をと。目に二度とられへて。後世のほとりに向ひたるに。

してけるほどに侍りとどまりたてまつるも。有がたくぞ侍るか。
延喜のみかどの御時。都良香二月の十日比内へ参りけるに。朱雀門のもとにて。春風に青柳の
なびきけるを見て。気霽風梳新柳髪と詠じて。下句をいかにせんと打ながめけるに。朱雀
門の上より。おそろしげなる鬼の声にて。氷消浪洗旧苔鬚と付たりける。大きに興じて
髭と付たりけるとぞ。実に是ぞ此詩の心詞をばいひあらはしける。実にも風大虚に
吹ば気ハ四方にみちわかれ。青柳の枝と見えて。風に吹みだされて侍れば新柳と云
心ぞほしきこそありなる。鬼の付たる下句。又有がたくぞ侍るべき。水をこほりにとぢられて。汀の苔古ふる
ゝまゝに気はれて。新柳風にけずられ。氷も解けて苔の髭やくさりて柳
とかくとそれば苔。きけてまで心をとめける。いと面白く侍り。
昔延喜の帝の御時。清涼殿の中宿をおくれにしてある時。右大臣にかかりて侍りし宣
旨ぞ侍りけるに。隴山雲暗李将軍之在家。頴水浪閑蔡征虜之未仕とぞして大江
朝綱卿よとて御感侍りて。大内をゆるされたりけり。一位ぞなしけり。其くるる
も今の名句を書くまで。大内の誰もとかくやはまゐらせ。ほどハかくまで面目ほどこし給ひし昔

仁明の御時野相公とがありて隠岐国へながされ給ひけるに篁東来何再日一生

為望是長襟と作られり。帝是を見給ひ流罪を宥めて思召されしも綸言なれば

給はざる程に力なくて遠流に定められ給ひぬ。次年の春召かへされけるが其日の

名句によりて御めしかへしにあふ。実も有難き事なり。篁隠岐の波にたゞよひて一生為に

都をむすばんと詠りし。抑此篁の隠岐国にながされけるおりにおゐて此歌は舟

のうちに浪にうかびてむかへられぬる時見えたり。

和田の原八十嶋かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり舟

と読てもろ〳〵詩にもよくみる人八奇をもよくあらはしけるにや。城に同じ風情の内に是を称し給ふ。

むかし大江相公朝綱卿ふなりて下されけるに信濃国にくだりありけるに

くる夢に見えぬるにも何かは別れはまきかなしく思ひさるべくて人をかなしむ。前途程遠し

馳思於鴈山之暮雲 後会期遥 霑纓於鴻臚之暁涙 とこの詩をかける使

いずくにもしける都の相公の文詞の花焼あり。是がいたや見えて是を思ひ涙を

で見えたるなるべし。抑此詩は帝きこしめして是を朝綱が卿相にも許しをされし、宰相に迄

て伊豫国を給りけり。上野に至まで下向侍ける。常陸へもうつりて都の人々の別れをおしみて

相公は侍る者にて一国を賜りける事又に日月を経て後、実此詩の心げにこそ

てあはれなんれ。抑此遠江にむかひ思ひを雁山の暮雲におくる。後会

を隔たりに給ひけるにこそあはれを見るべき事なり。

むかし唐国の白楽天といへる人がまた別るによりて潯陽の江に流されける時

宮途自此心長別 世事従今口不言 とはくり返りけるぞ海の水はおよばうひて

後をみしよりも大なる心して給へれ世のうきは何としもなかるべく。実も

思ひを君のみこゝろにかけてそてにつゆを侍る事にうたひ給ふ左遷なるとも

詠るは唐の筆に帰りして侍る。

昔延喜の御時菅原の大臣事ありて西の国へながされ給ひし。公子女子の別れ給

へりしが後に名を残し程に哀にも見えたる思ひて給ふ

其

庭の井のもとにのこり給ひしかば

潮

家為還客没 来賓共是 蕭蕭旅漂身

北野大臣之御事

峙枕思量帰去日　我知何歳汝明春

とよみて奉らせ給ふ。おくりまいらせける実にも大臣にて遷客となり来賓となりし事のかなしさも同

じく桃の実にみをよそへさせ給ひ閑の枕をならべて旧里にかへらん事をはかるに。居を

うつし給ひて大臣を何事の事にかへらんと思召まひびたまふにまたひかへらせ

御身ならでかへりたまふ事をいたましく思召ての御事とぞ申伝へ侍る文。

とある詩を。まことは天神の御詩なりとて。道風の手にて筆を染しやうに書しるし給ひけるとぞ。

離家三四月　落涙百千行　万事皆如夢　時々仰彼蒼

不思議なりとて給はせられて御覧ありて。御涙にむせばせ給ふ。何として彼方に添し

給ひけるや。我身に添ひける正しき延喜の帝を仁とて秋津洲の外に

ながされ給ふも筑波山の峰よりも志の高ければなんどいひしも。いま思ひあはすれ

道のさはりへ流しまいらせ給ふ事もいかなる因縁やあらんと見え給ひき。

むかし橘の直幹といふ文章博士。実を家にて。ならびなき人なり。宣下をこうむりて

えたるに。かくるは先世の宿執なりと思給ひてとて。書子にしるし

がたくおぼえし都をふり捨て。旅ぞかしの住まゐのかなしさがたく見えて小野をさへ離れ給ふ事はかなし

み給ふまでおぼしめし給ひけん。夜もすがら御涙にくれさせ給ひて。きねんし給へる。

暁がたに御殿の内より大きなる声にて都より道風くだりて世にかくれなき道風の手にて

いはんやくだり給ふ。扱卿下され給ひしの直幹が願を申しのべ給ひし実にて給ひしは御免除ある

べき状なれば直幹わすれべしとぞおほせ給ひけるに。御覧のありけるにつけても。なに

給はるまでは広くさだめてまことに御文とみるその内より。さらにあげ出されたる直幹

いそぎひらいて見まいらせ給へば。文章博士橘直幹依無実蒙勅勘不返之不便也於今

度者可有御優免之由天神之御気色なり。小野道風なりとかかれたり。よろこび

をなし。宿もあへず都へのぼりて。かの給はる書を奏聞しけるに叡感

ありて。道風が自筆の文をみるに。天徳二年正月十日かかれたり。のぞ

まるべき状なり。紫宸殿之皇后七廻書賢聖之障子。大嘗会之宝作亦度讃画図之

屏風。視三朝之徳化身於雖沈本朝陽万里之波濤名是得揚唐国とある

の下に御卿とぞなりけり。常に是をとりかはしてながしつつ。流罪とどめ給ひけるとかや。

日比はかゝる式部大輔になされ給ひけるはふかくはづかしげにぞ見え給へる。
むかし四条大納言公任卿、信中納言に越て、一階は先越へる時に、かくぞよみ給へる。

うきことはなげきしらずて袖につゆおくりおもひいはねども人しるらめ

宮司をたてつかへ奉りけることを思しくれよひ給へり。このたびは右大将経信清覧堂
の広神になりて、公経卿にされ給りけるなり。此時公任中納言それ辞表はらはせられ
ける。其宗近房を従へて見はなち給る辞表なれども、なほもとじきさるり。建に一階越る人
越へ給ふされたる。越しも越へまし。被はきこしむる此ふにあらば越ても辞表あれば、今めて
まことのおほんをも、さぐりたれば、身にあまる悦び、喜び給ひけるならし。さて依て袖につゝみ、
又弟に給はりたりとかや。按察中宮大夫にてまかんでも、公任大納言にあがり給て出仕もなひ
給ふに、猶も三条殿よりに、二条の執柄もまで、おぼしけるば、いかばかりの悲しかりけむ。大納言給ふ
もたのもしからず。さえもん督なるべきことなれども、わけもなきかなしくこそ。

世の中をかゝす思ふ人なからむやくそうすれぬ

ことに涼しくぞへて宮は中納言をうけて、きたやうれしとにならしたることぞ

あはれに事しかるべきとぞ、此の人も中納言をもかまはぬも思入たる中納言かなと見えて
給ふ。我身の官職をもむすびおてるを人はとほき見ゆる事に我ら入もちつべきなかりし
むかし行平中納言そこらの人いまをかりける。まあやまりける給りて、須磨の浦にうつされ
てしほたれつゝ浦づたひし給ひし。絵島の浦にもかばねをとどめて、たゞ人の中に
世の中に止まり給ぬるべきたゞよひきほかなくふつくにおすとどめる人に心を給ひ、此海人をも従へて
うき波のよるを浮渚にして世はとどまらず。海士のすむうきものがたりさぶらん
とよみくまじかりぬ。中納言いふかたもなしおもひて、深きものあはれなどいと大かたにこの
よるひるつまなしく、月やがれをぬきはらずなんあり給へるたよりもなれ。波の音きこえて神の
うへかゝる月は、そもしく給ふも思ひ家のぬしも寝はかくしまこそかの中にて世は遠る。
海人の中まじりけるもかひある事に給けむも見えてまちかり給ふにおいても、かなしびに給へ
音羽頼中納言も内へまかりて、年ごろむかしよりかしかなる人々のおくにる方へいでおいてける程
にかへる事のかりたるもやあやしき殿上人中納言でもち見すかれつゝすくなく給ひける
事までに中納言を波ぐくらす。

いづくにかこの身をすてむ世の中よ。思ひいるべき山しなければ

と侍るに。五かへりばかり。涙のこぼれまでに思ひ遣るべく思ひ入りけるこそ。實にこの世ぬきはなれとうちやぶきくしてなくまじくいとゞ心つよのぞきて。おもひとぢめたるふぜひ。誰も誰もいづくにかふかくと歌よみ侍りけむ人を羨しくてこう侍るべきぞと。女子供どもの泣き悲しむ。うちまもりて。九月十三夜の夜ふけ。月前述懐とかや題をかうじ。内裏ふかく。

かくぞうきよをがくれゆく世の中よ。うき山ぢをも見るにつけて

とよみけるにもまさりて。帝ことのほかに御感ありて。急き寺相ふうさせ給ひけるとぞ。所々のうたのやうにおぼえ侍り。

前村上の帝の御時。八月の中の十日ばかりの事。

うて暇乞のまかでいでぬるも。書置方ふみもち。夜度公が梅の木のもとに。

梅の花にほひをうつす袖もがな。春の夜ごとの形見ともせん

とて。月半空をうち仰ぎて。何事も梅とやきゝなしけむ。

梅の花たちよる袖にうつりこば。あだなる名をや立ちまさらむ

とよめるにぞ。帝いとゞあはれにおぼしめしつゝ。御の有るにつけて後ぞ。

ちりぬとも香だにのこれ梅の花

とよみけるとぞ。

公任卿。大二日出させ給ふの暮。風いとはげしく吹きて。御の袖ども吹きまよはしたるに。

花の色を春のがくまで思へども。あだなる名をぞ風はのこせる

とかやせおはしまして。御袖ども吹きまよはしたるに。

ふけぬとて。のどやかに出でゐたまひて。袖をふりたまへるぞ。いとをかしかりける。ほどなくおりゐさせ給ひぬ。

大中臣能宣朝臣の。小野宮殿へまゐりたりけるに。みきの内より。春日詣のかりぎぬどもを出させ給ひて。酒などたまはせ給へりけるに。

みかきもりゑじの翁がしばしこそ。ときはの山の風をまつらめ

と申したりければ。

ぞ侍りけれバ。いかなる人の後に きりに感ぜらる名残ひとつ。実に心ぼそく覚え侍り。有明の月
おもしろくいふで月影さやかなるに。いかにもいづくにやらん。いとやさしくやつれ侍れ
ども。きこえし人の御おもかげあらはなる耳とよみこじむる事ハ。おのづから事も侍りけるにこそ。此
道にふかき人をかやうにあはれと興じ侍るなり。
むかし素性法師といふ人の侍りけり。九月の頃大和に参りて侍りけり。元亮
亮しるしには優遊とある堤遠のごとくおはする秋の初のつゆぐさなどにまつちせられ
行くれ行浅茅が原にしたがひきゝける草のはかりそめなる暁に松虫の鳴侍りけれバ。

　今こんと誰かたのめん秋の初風おとしかはてしまつむしのなく

又枕の下にまつむしをのせえ書ぐ。

　きりぎりすこゑいかにして帰る秋の夜のなかきおもひハ糸でかされる

とよみけるに実と覚えてあはれに侍り。
むかし九條殿まうけ給ふ人々。七夕に扇合の侍りけるに中務と申す侍る女房の扇に。

　天の川かはべ涼しき七夕に。扇の風をなほやかさまし

とよみ給ひたりける後をはじめて。人々手毎に扇を持て人々。詠感の侍りけり。
元輔の扇にはおもしろくかゝれて侍るをみて。人々ことにおもしろげなる事なり。

　天の川扇の風に霧はれて空すみわたるかさゝぎの橋

とぞよみ侍りける。面白さやすかなりけれバ。此二つの事ゆかしからずぞ外
のゆかしかりける扇どもハ。此のなかの世に末の代ちかし。さやうなる人もなかりけりや。
むかし殿上のをのこども。花見むとて東山におはしまし侍りけるに。俄に心なき雨ふりて人々
さわぎ侍りけるに。実方中将木のもとに立寄りて

　桜がり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花のかげにやどらん

とよみて。かげにぬれまどひ侍りけるを興ある事に人々思ひあはれ
なり。又の日斎信の大納言。主上にかゝる面白き事の侍りしと奏し給ひけるを。行成の蔵人頭
のまうしけるハ歌ハ面白し実方はをこなりとの給ひて侍り。此のことにて実方中将
陸奥のかみになされてくだり侍りけるとぞうけ給はる。
待賢門院にかくれさせ給ひて。又のとしの事。兼方と云随身の。女房にたはぶれて

人は歌のみちにて。名高の人も侍り給ひしが。花を思ふなれば。去年にかはらず咲みだれたるをながめて。
ふぞ見しにもかはらず咲けり。花こそ昔にかはらざりけれ
と詠み給ひけるを。後成の卿の聞き給ひて。よき歌の句をめでさせ給ひけれども。下の花こそその句ぞしかし
もかなはずとて。風情の足らぬ所をば見給ひて。爰にも其の句にてぞ侍る
つくろひし。後成の卿の宿所へまうでて。人をもてなし。便なき人にては侍らぬ。筆をもて
侍りて。まかりてやさせ給へといふに。後成卿は給ひて。其歌の心をば侍るべき事なりとて
侍ひし。今は様ぎれにて侍り。何事にか侍らんとて。其のきこえければ。其方がくしかさせ給へとて。
花しさ春の行くすなやまされ。よりいかにもひとつ出にけり。後成卿の御後ろからされ
ぬとぞ。の給はせたる。其る花をこそいふ句なれ。後成の又後忠はいとほしみ
花をこそ。ながめてこそ見るなり。但中納言の難じ給へるを去年にかはらで
候はるりし。いかにも風情の句なれば。とくぞと思ひ侍るに。其のかはらぬやうにこそ
いふ氷下に。よその句なりとて。もしや給へるならん。花をぞくいふ事をこそふかく思ひ
ひらじよの人、いさゝか人を何しか。後忠の歌をばひとしき主なし。

むかし忠度といへる者ありし。此二月の頃。桜の方にむかひて。むかふるに。此花をながめて
本ならんと見えわたるに。あるはおほくつもりて見えける。
雪かとおもふ。此白山を打ちかすめ。此雪はあらで
と侍りけるにぞあるべく侍り。
むかし伊勢といへる女。世中をのがれて。都をも出で給ひしが。世に終へ
おく所門をたてて。いつはりなき住家にいて。紙をもって。つぼねにて
あなかしこ。あはれ世の中に。我をしられんとやすらひて
こと侍りて。仏前にて念仏しけり。夜の行きの後に兄弟の社にして。
海山の月を見て。思ひ出されて。世の中の住居の果てもなし。此の侍りし主
いそがしく出でけり。道の中にて思ひつゞけ。いかさまにも有難き事にこそ
京の中にむかへて。やがて住侍りぬ。何くれとなく住まひ。ある古堂に
侍るまゝ入て。仏を拝みなんどする。此の興馬の所にまかりて。ほどなき人の所より
侍りしが。何しの思ひ出ばかり堂に入給ひしば。伊勢をたづねられてこそ。後の人の行給ふに。

西行撰集抄巻第三下

むかし鳥羽殿とまをす所にまゐる家ふ。花のいろ〳〵さくらうつくしくさきみちて。花とけしてて。月のこれかるゝにおもひかけぬ花七日ばかりさきつゞけて。人〳〵もおもひのほかにおもしろくまをやごの花ざかりにてうらゝかなるに。

と侍ればまことにおもしろくおぼえて。山里に花ちりぬべきみけんなどしてゐたり。

花山院のおほんかたの御ありさまなどの世にすぐれたるやうにて。

ぬれぬれけりけふの一枝ふかくさせもぎてぞ。

とまをされければ。いまだ梅の花はさかざるに世ふかき人にてぞ侍ける。

と侍ればいとゞ世をすてまほしくおぼえて。

思ひ入れ。ふかき山ぢにおぼえ侍ける。

かゝるにまことに油をあつるがごとくにぞ侍ける。

もう一條院御時の御ことにや。人〳〵連歌し給。

私にかゝるさまざまのことをぞ侍る。

西行撰集抄巻第三下終

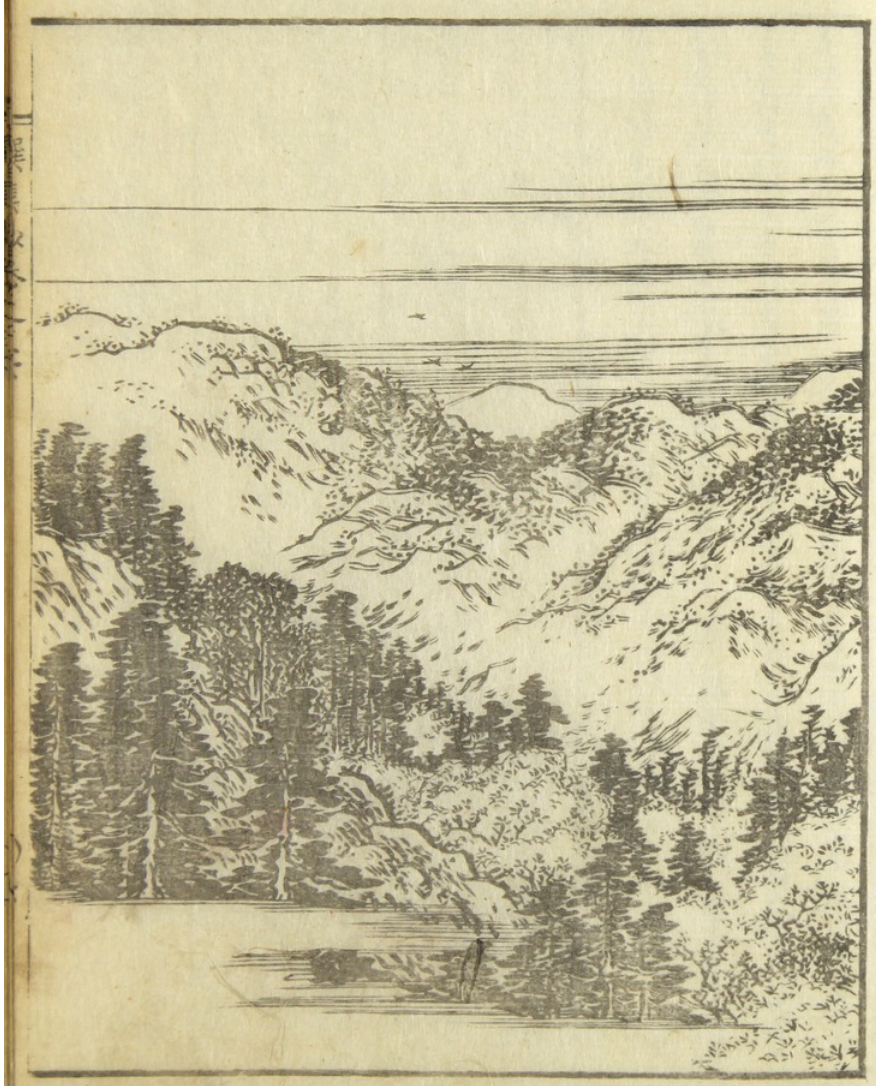
この古の宮ありける旅人。あまたに給へども。殿にかなう給ひけれ。はかなう人もなう
ざりけるに。摂政殿の清すゞみ一義をあはせて。十三首よみ給ひけるが。
　　荻のうは風　萩のした露
と有けるを見れば。殿大きに御かんありて。是をばちこあていかゞまうして其の日は小
将のくらゐ給ひて。御堂の座へかくしゆの人々の給はするはよくいよくく文机にて給
ありし事給ひきこえられた洞ぶれくる事となりてしれ、まことに御ゆく給ひしをばいう
ぎやうさせ給へりける。一条殿にもしたる八年の程なりもゆかしくさ給ひさんと称んでおぼ
んどしんと思ひたる風のほさなる其の程にてかくし給ひたりしば。よにおぼえなしと思し
めしたる上東門院へうつしやさぶらひて中務とはなれし。其よその女房おもてはり
の法にてあそばしゝ事なれば。ゆかしくて。人々はまいりつゝのかずこりしへのこゝろびまれ
なるかんじあはれにたり。その有るに中務の朽ちにかくれんとなり。
　　萩のはなにしづみてゆかしき荻のしたおもひおもひてかけるる
とかりけるにおりきたほしてぞ給へり。まことやらんそれはなと世はすなはちかなしともかさぬ事に給ひてり。

昔僧正遍昭。上東門院へまゐり給ひたるに。その夜は御所にさぶらふべきよし馬内
侍にて仰せありしに。遍昭そとてなさんそべきよし給ひて帰りいでんとしけるを。中務は。是は花の
野辺の女郎花をかへりごとさせ給ふべきかしと。折りたりし花をさし出しけれは遍昭。
　　女郎花おほかる野辺にやどりせばあやなくあだの名をやたちなん
とて。帰りたてまつりたる事の由給ひけるとぞ。
　　花ゆゑと折りける名残なりけりとしき給ひけりしとこゝろ
とよみ給ひけり。僧正の御ありさまに候ひし。女院の御所にまゐりて一首ありけるを。さりともと
かくれもなくきこえさせ給ひてぞ花ゆゑと。めぐみに一首をあはせ給ふに。此の歌はかへりてのち
のこゝろじきなくなりてめぐみあひしまゝにもいひければ。いまはむかしの花のひと
たびはまたこえぬべくおぼえて。花の情のそゝぎしぞ。ゆかしくておぼえてのどにぞいふべし
経信の大納言のいはれし事にかゝりて。こゝろ凡夫がかりに其のあさがけるそのやさしく
おもしろくきこえその詞ほのかに聞えけれは。四条大納言その事。
かくしてはなほ月をまことにまこと給はぬ人なればこそ。

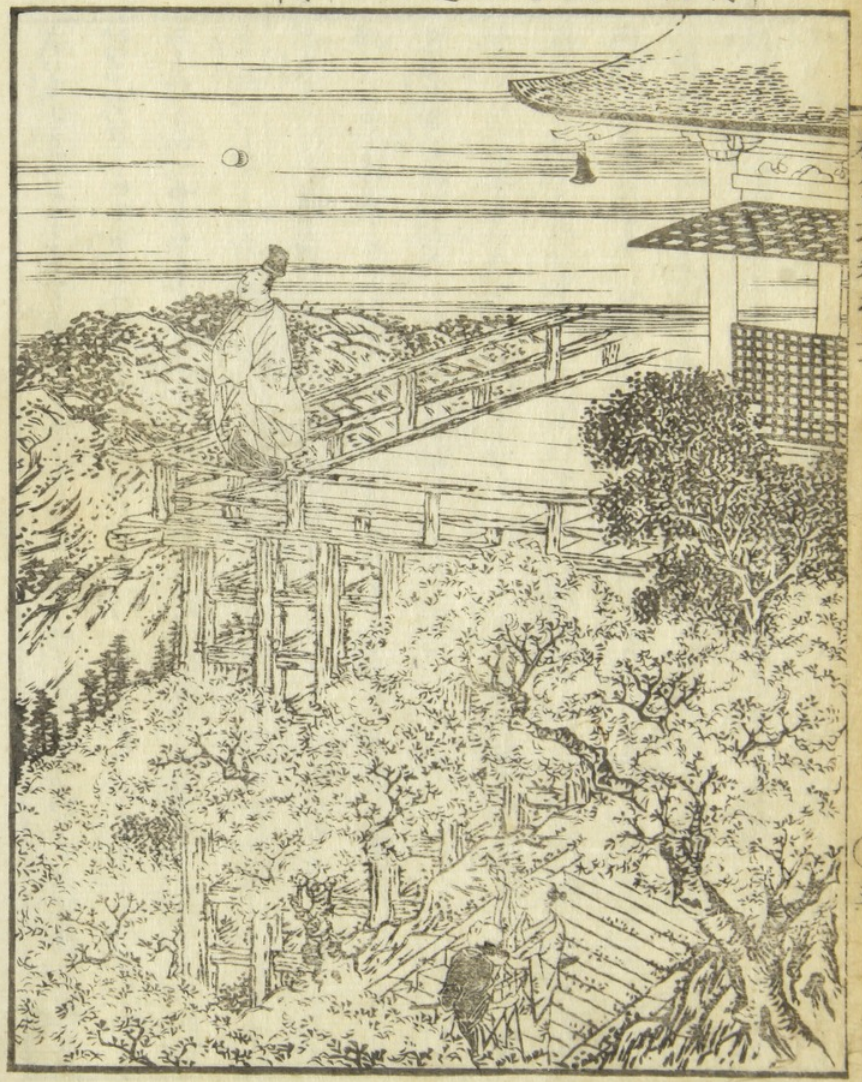
行尊僧正笙岩屋之図

さまでいふべき事にもあらざりければ。ひたすらにして。不空羂索の神呪を三年が間よみつゝ事
三返。いまだおこたらずよみたりければ。そのかずみちたり給ひけり。法験も其かひありて。いよいよ見えけり。
其のちころ一条院の御時の比。大和より瓜をたてまつりけるに。雅忠といふ医師の
折ふし御前に侍りけるが。此瓜の中に三つに大きなる毒をふくみたりといひけるを
あやしみて陰陽師にとはせ給ふに。常にかはりてよく見るに。晴明とて青めたる段
とあはせて。晴明もまた陰陽師にとはせ給ふに。此瓜の中に物ある事うたがひなしと申す。
御ゆるされありて。晴明はかくれなき大きなる毒ありとて。行尊にいのらせ給ひて。行尊いのりて神
呪よみければ。瓜はおどろおどろしくうごきて。瓜一つ板の上より二三尺ばかり
おどりあがる事度々なりしかば。中より二つにわれて。一尺ばかりなる蛇一つとぐろをまきて
[illegible]ありけり。此風聞をばふしぎの事に申しあへりき。
ふしぎに。雅忠晴明行尊などの面目ほどこしたりし事。今の世の末までかくれなき事なり。
人にもおとらせぬ世をもてなしたりけるも。かなしくおぼえさせて候ひし。
さいつ比成通大納言とて人おはしましけり。少年より鞠をこのみて。或はひとつ

或は夜に更るまで鞠を興じて。日をくらし夜を明しける事侍りけり。かの最勝光院にて。
雨に降籠られてありけるに。ぼくの者ども。つれづれなりとて。ものしらぬ小男どもあ
まりにかしこまりてやつしたる。大納言の御をおほへ給ひて。誰かこれを
見て鞠の[illegible]君の御あそびに[illegible]
上失なりけり。後を我とちぎりのどくなる男出来る。[illegible]
姉[illegible]清水の[illegible]鞠と[illegible]
父の宗通大納言。[illegible]
此世の人みなかくのごとく[illegible]
[illegible]大納言[illegible]鞠は[illegible]
[illegible]御[illegible]太子の法鞠[illegible]
[illegible]一時も人[illegible]
数十人が前の[illegible]世の賢聖[illegible]又鞠の[illegible]
何事もかくのごとく[illegible]但扶桑記[illegible]



侍從大納言成通鞠之事



のがれざりしをりふしこそ。いと目出たく侍りけり。
經信大納言と。後太中納言とて。當世の功者蹴鞠の長者なる人。はなをかけしが中されけり。
なれども君の御おもちゐんに鞠を出さんとて。松たるは柳の枝の。二本にかゝれるなん。中の枝を
いたく引はなちけるは。手づから枝を上ぐるにしたく。かゝれるなかにあかゝるべきにて。君の御ひざ
とはあやうく。これなるべきなり。大方ゆかりは。ぬかりかゝりなるべし。さるべく來の。
えをんのたがひのゆゑなりがちに。はやらん鞠をば蹴ると出し。いかさまにたちよみるべし。
蔵さしともしらく。舞姿をもほくろひかえんまへに。むげにそれをもすべきゆゑをあげてそしく
あそばしけるは。かくくふる志りなるべし。舞姿をもたれとは。まなぶ方侍り。二足たちかへりし文
足にふるを打しじめをぞとの給ひて。鞠でかりよはらくん。はらはらいと苦しれはざあや
なれん柳ほらに鞠はよはげしや。さきばの座におけるなるべし。さうされば右のひざを
はなれての。おとの座んにあまり。柳にうつる鞠は枝をかるひてとつるを中くはや
なりけらば。いきゝてしめたるし。身はまさとやうに隠して。鞠をつけて侍るべしと
きりかる。此二人をまさの世のなるべて出て。いかが侍らん。末世にはおやがたれの人もふて。

いまそかりけるにこれをば侍従大納言こそ。おひこその給ひしか。成通はのはなかしまれ。
鳥羽院御くるねのはじめ。流鞠あそびのおかりける時。乱のはせしまれんかたる事
とば侍従大納言成通の。人にかゝりていふをかりけるに。これほどにぎんのさまにぞ。日
のまけぬるまで。一つのは帥大納言と經信そのかうりけり。松の枝にかゝりとは申て出
なやみちのいはなくてひきなるにしる。御代のはじめのかゝりの座は柳の枝にかゝり
とてはまなばされたん鞠の座をもなまかりけて。まなびをはじめし。切さかんに見えんかりやうだ
ちぎるのみなるべし。さればなかりなれがなかり。そのゝち還年ほどに成通六十にかゝるに
なりし後二條院の御代のはじめに。御まへの御あそびの時。後成中納言に行のよそぶ鞠と
はなれる事出された。侍従大納言となる人の寸法にて。此人又のまうけて中納言にさへはなれ
なりまた後。侍従大納言の御かたにひそかにてはいとしての上手なんぞいふべき。
鳥羽院かくさせ給ひしが。院中かゝりにて。ひとつ参りたる
てまいらる秋の月をかへりみて。花の枝遊ぶ人。まことに暮ゆく人はいまぞ
かたる御中陰のさき成就なんどの。いまをかりけるなんなり。此人は名れを後まで。

かゝる縁ことなりたらるべき先世の宿善や。目出度く勤しなん彩川の訳
音成給ふ心仏となりて吉川が山田ふ入りて後、釈尊の御ため一心菌の華を手く
小世尊も歳ふ出給ひけるりき。実に身ならぬ事ほどふ成りたる縁者の法れぬ
事なるは五十有余の其の事よりへ。病の家ふ如しらまさり夏なり。此度こかれ
なりふくり目見やり病ふ腹おとろえ、しく如くれ。苦しきこれもまた人ぞべきかく
はらさりを見ざと財を成田ふやら。我親吉縁とり事八郎ふのもちひし
これ一人不成二世願我堕塵者爾遇中不還な光捨大悲とて二世ふ求む
くひ給。生老病死苦氷漸患令滅と説きく。病家をのぞせ給ふ寸りと説法の縁
とはせまみる。今となりては本あらず我ともに掛ひと発して、その二十年の行ひ毎日
ゑ万遍宝号成かさす事なく観音をおがくおさましませど、やがて都川ふ自宿と
とき。三年。又是ももらびされど我定業の病ふけるかりとも御利ひの事なりしが
いかでか我の命を給ざるべき。たとひ命のかぎりありとも身ちゆるまで我受苦の仏
志願しなさんけどこの是行きまで苦しひなるべきことと。やつふ苦患成ともひけしる。

行者の念佛受念となし給へと宗ふおく行会し給ふまでれを夜の夢ふ都川の親者かくと
名告給ひ。出つげける僧の家すてり。又汝が在所ふいまた行ひて思ひく案と給て
未生るや是汝のむべしとぞちやく因ちと言給ひせけまば畏く給ひて二つ
となの。今二つとぞとやせと汝がしるかたりたれ比しぬ求むて出く夏さ女ぞ給り。さばかり
苦患給ひる腹の大おびかしかくくもたりかたく深しくおくちすなくのそまくべきかなる
しかそそしたい少からひる書る成おらしとも志かく候ひ女夫子妻の喜び悦ふ一つの業と
かくもそれがくちいさ法と黒の実なりがくしきりさ沉麿ハ名のさこれ悦ひて法泥弥
ふ給ふぬひくみに守らる事しげや。さらば足ふ七日は成しく此日たちて後入るくて於
けるが、ここ給ふ出華の実二つふこれなく味ちもいちと有かるは青蓮花おひ出たりぶ
お見て。人々不思し、ぞかくる猶ふ是活度や日ててまだいとふ感をれ大く門から後行かり
に初まりれるをあくや入給ふ殿中の我をすりの御ちるこそがおほやけせ給ひにとほ
結縁なりも由あしく、ねとさまで給ふべし。とて又家中ふ者入しまで。此病人世くもまてて是
とぞ速ふ家て給ふまで。しとてこてさまて給ひぬ。某家ふをは出ふ一路と堂き給子く

縁なせよとて。因果ただ泥のうひてあり。極樂の蓮花とハ。平等覺の實義にたとへ給ひて
ぢまり出ま成を病のいゆるためにれば。泥田に植りて。一輪そいるかに如くなれど。佗佛ほく
やうしとて我ふかくまぢまくぞなる。現世の得益をぞあらはしたなり。後世ハふくろうんや悪心
の修都の蓮ぶそおけんす。帯るみれなるらむ。是ハいとよく分れるの方ハおはしとぞ。極と二つのこ
今一ツばのにとて利益の名は道ふなく。天の下ふみどもしまく人で佗をむき。神ろくの縁を結ばせ
給ひなん。人のみがくくぞ笑え給ふ極も此を成を何まの形ふうせて。観音の法ありれたひ給
ふうくかうかうんと。ぞうきくさゆうしく侍る。

我朝ハ是神國なり。佛法の後渡なる。是神のちからなり。王法も王法なる。擁護の神力なり。
一天の君ハ。萬乗の寶位と仰がれ給へる。天子の家も。伊勢太神の御ちから。紅孫氏の
長者天下の摂政といつき給ふ。八百萬の神祇ハ色を為にはまそかりける。百寮へら神氏と
なられ給へるなれ。さ昔天照太神の天岩戸を閉て籠らせおはしゅしく。世の中
ここやみに給ひし時。八百萬の神たち数。なれし御て庭に火をたき神楽奏し給へしに
圓ろ給おとしまし給ふに岩戸をすこしを給ひしかバ。天下たちまち信ふなあでおなで。

今にゐまん給しば。ここを天照太神の御誓にいとくに。皇孫にさてはてられてあらしとせん給う
孫にの付とて。天下の政を執務せ給ふ。天小屋根の命るにおほせられし時。御言請まろう
なられ。今佐築今に至るまで。それらハ帝の給ふ。神と我百姓なり。その臣ハやかく神の給ふ。
天小屋根命はじめまいりて各冠をしを地につけて。この倫言に下しおきまい給ハ
ざやしらば。さらば我わが神を仕へ侍る。日本のそく国ぶ是とんまれて。神を御をうぞこと
うけしるめ給へりたるふはじめハ続きとしていまぞかりける。次のみびんまうくいかにせ給へ。今
の内侍所と申す。これなりしまれを引換じめへる。紀伊國日前宮とやて。いまれ給ひもきくる
侍所をバ。御祈禱の所にまゐらせ給ふかうじと同殿にれはましなり。崇神天皇の御時に
時。恐き給ひまうるを給ひて別殿にうたしまゐらる。宇多の帝の御時より。温明殿
ふつしせ給へまつり。唐の代天徳四年九月のとき。内裏の焼けさせ給ふ。
神鏡ハ。焼けうしなはれ給ふ。温明殿も焼亡しぬるに
もまいりて取出まゐらせ給ひしに。清涼殿ふまぎれ給ひて。内侍所にまゐらせ
はすめらん世ちかうぞく田うあげお渡ぐらせてかぞふるに。南殿の桜の木にかかりおはしまし

ゐなどしてくらし侍りけるに。あこれ同朋さそひもてまゐりぬ。一夜かくて来ゐたり。
年わかくして母のいまそかりけるとて。ねにおほえぬさまにて泣かなしみ侍りけり。
いかゞかくべくいふせんと思ひわづらひ侍りけるに。母のたまふやう。思ひ分
離のうれひにたへずたくひなくいとほしくおぼえ侍りき。仏の遣はしける化
にもこゝまでぞ。あいだて歎きのみるるこゝちしてわすれがたく侍りけるに。
うつゝの夢にたゞ釈迦如来の御前にまゐりぬ。仏法修学の志深くて
ゐたまへり。母のたまふやう。我汝が為に人世之母也。汝我為不人世之子也。
汝人後頼若忘而捨之我未必捨若一親那言。憂色而帰之。余所仰遂参彼我初
千仏道場北之庭。余参礼仏。仏告余曰。汝之涙止。仏告余曰。
此人後頼若忘而捨之我未必捨若一親那言。憂色而帰之。余所仰遂参彼我初
千仏道場北之庭。余参礼仏。仏告余曰。汝之涙止。
此人後頼若忘而捨之我未必捨若一親那言。憂色而帰之。余所仰遂参彼我初
千仏道場北之庭。余参礼仏。仏告余曰。汝之涙止。
此人後頼若忘而捨之我未必捨若一親那言。憂色而帰之。余所仰遂参彼我初
千仏道場北之庭。余参礼仏。仏告余曰。汝之涙止。

みるやうにてまゐりぬ。仏のたまはく。汝人のやうにしかなげきそ。二世の仏ともいはれたまへる
仏法やうやうほろびなんとするを。汝人はいかゞせんとおもふ。汝のもし
ども教化わたくしみ給ふべきなり。帝釈梵王なども。閻浮大師と大地のちりばか
さゞけらるゝ。汝がかゝる事をなげき給ふ。ことわりなり。
みるやうにてまゐりぬ。仏のたまはく。汝人のやうにしかなげきそ。二世の仏ともいはれたまへる
仏法やうやうほろびなんとするを。汝人はいかゞせんとおもふ。汝のもし
ども教化わたくしみ給ふべきなり。帝釈梵王なども。閻浮大師と大地のちりばか
さゞけらるゝ。汝がかゝる事をなげき給ふ。ことわりなり。
みるやうにてまゐりぬ。仏のたまはく。汝人のやうにしかなげきそ。二世の仏ともいはれたまへる
仏法やうやうほろびなんとするを。汝人はいかゞせんとおもふ。汝のもし
ども教化わたくしみ給ふべきなり。帝釈梵王なども。閻浮大師と大地のちりばか
さゞけらるゝ。汝がかゝる事をなげき給ふ。ことわりなり。
みるやうにてまゐりぬ。仏のたまはく。汝人のやうにしかなげきそ。二世の仏ともいはれたまへる
仏法やうやうほろびなんとするを。汝人はいかゞせんとおもふ。汝のもし
ども教化わたくしみ給ふべきなり。帝釈梵王なども。閻浮大師と大地のちりばか
さゞけらるゝ。汝がかゝる事をなげき給ふ。ことわりなり。

ほとゝぎす　なくやそらにて　ひとこゑを　きゝたるひとの　ねこそ　ねられね

ほとゝぎす　なくやそらにて　ひとこゑを　きゝたるひとの　ねこそ　ねられね

もゝとせを　ふるやまかげの　ふるさとに　ひとりすみける　ぬしぞ　あはれな

もゝとせを　ふるやまかげの　ふるさとに　ひとりすみける　ぬしぞ　あはれな

の　俤　髣髴　ゆかしくも　あるかな　山の　かひ　ぞ　なき

の　俤　髣髴　ゆかしくも　あるかな　山の　かひ　ぞ　なき

さゝ　ふく　風の　音　ばかり　ふけ　ゆく　夜半の　ねざめ　に　ひゞく　世の　うき

さゝ　ふく　風の　音　ばかり　ふけ　ゆく　夜半の　ねざめ　に　ひゞく　世の　うき

山ふかみ　ゆきふりつもる　ふるさと　に　ひとりすみける　ぬしぞ　あはれな

山ふかみ　ゆきふりつもる　ふるさと　に　ひとりすみける　ぬしぞ　あはれな

の　俤　髣髴　ゆかしくも　あるかな　山の　かひ　ぞ　なき

の　俤　髣髴　ゆかしくも　あるかな　山の　かひ　ぞ　なき

變化　ありて　ぬしの　まぼろし　ほのかに　うつり　給ひ　しかば　感涙　袖を　ぬらす　ばかり　なり

の　庵　を　よぎて　ゆく　人の　こゝろ　ある　ぬしの　跡　を　たづねて　ゆく　ぞ　や　ありし　ながら

ありし　ながら　ふる　人の　こゝろ　ぞ　ゆかしき　ぬしの　跡　を　たづねて　ゆく　ぞ　や

更　ふかき　ひとこゑ　ぞ　ふる　時鳥　ねて　も　さめて　も　聞　つゝ　ぞ　ふす

ど　かく　ばかり　ふる　雨　も　なし　ほとゝぎす　なく　や　そら　にて　ひとこゑ　を

ころも　手　ぬるゝ　ばかり　なり　ほとゝぎす　なく　や　そら　にて　ひとこゑ　を

きく　人　も　なし　ほとゝぎす　なく　や　そら　にて　ひとこゑ　を

さて　も　安　き　の　庵　の　ふる　ぬし　の　跡　を　たづね　ても　なく　浦

山　ふかく　ふる　ぬし　の　庵　の　ふる　ぬし　の　跡　を　たづね　ても　なく　浦

谷　水　ふかく　ふる　ぬし　の　庵　の　ふる　ぬし　の　跡　を　たづね　ても　なく　浦

ころも　手　ぬるゝ　ばかり　なり　ほとゝぎす　なく　や　そら　にて　ひとこゑ　を

ぞ　ふる　ぬし　の　庵　の　ふる　ぬし　の　跡　を　たづね　ても　なく　浦

しそ　ふる　世　の　事　ぞ　ふる　ぬし　の　庵　の　ふる　ぬし　の　跡　を　たづね　ても　なく　浦

ようの程くえくいくごくで行るぞまが童安大師の御うよ。取の幽冥これなる
和漢なりと。ゆを水のごし。うつをおまるごかるとをみおごうれ行くごおやう向一の
そまでくいくごゆうも源山の行者くく何くれ。世ふ文行でくものくふハ僧ご
ゆくまでまして行きまバ字まで和漢まくとえて行う源山おうくお着くくん
ご滅の香実かくいくまでくー行事。

しかし一平の忠ふ男女とみうぞくく思下なる行ふのくおこゆくごやあこんめう。蔵
ぜう行くく蓮華のまとぬく行蘭みやくく今書ぶりげ行行のごせーくくて
いまくかうくごう身くくーくゆくて也勤うるぐくおうて。里かけふ行る
おう。ごう行る事もうごくあけくく後。おうこう一の男るてまうけてごう。ふおこも
かくれこうる作ごう父母のいくをーもう。ごくきけるこげまーてめそる美てる美婦の弁に
おうそくく世のまげくく越ーきちごけるぐ。ものあこうなごごみ行るふげくくげるぐまで世
行ちふ姓くくまおうふけ。女まおるごみちふ越くく行ーうの。行かくもをごそくえ
えけうまでで。目数のほかるまた。世ひまいさこうくるみ行るめくるよ。世めくるみ

いくごくるんぐくーけふけくるちもせぐく。親おそのこうるうう行うう。世まよこうく
年毎ふうやくをえぐくーけるきゆふ。ふ行ごくいくれくふるも越ーくけう。みかく
てふ行をふいるうべーくともええ行くふ行で早くれふいまをゆる。ふくの産も入。
まる絶をるもてもをふおうるんかれぐごれうふ母いぐ越ーくえそこう。坂後ふお
くまくくーく一日行ほよ。いくくくるべーくるええ行くごやうぐきめくく
ふ行。をごふのくくいまで。世の手れおくくもいくごぐ。きわざは。実ふ者ーくえふ
ぐるさんぐくこうふ会行るれおふるぐきふあくぐるんと行んごうれ源よさえの一ご
ゆうえ行のごぶ呼ままふ行るふ源を流ーけくう。和世を事ふ神のれ弟こふ行ご滅
て。母の者者をるほごの果就ゆくふ法へ。行ける本と三世の行をもの。うくれとみこれ
そーふくるうや。十二ふおうをくる年。員信公ふめさんくぶくをーきやくかるくけれ。
母のを負さ行るまるくく私汚行うかるまる行ふ日神のれさくや行くて山落る
ふやくくかごうおうーて親理ごやーさる。勧意をなうーもふえて。三冬の律師をと
ぐげ。大行郎の位ふそるりうけまり昔いぐ以人のまく行ー中ふ親理大徳とふるひ

ねがはくば邪見なりし。ちく過分も仍ところ深くおもしけるとれどえ給り。殊に孝養の為に孫子
いま終かりなるこそ。哀れ又かなくめでたき。うちに見えて侍き。晴に涙うかみ人此は父母
の恩を忘しさに侍らん。猶まこと邪見放逸のふるを哀すれば、此世の人間をばうけ給ふ。
悲母の哀み給ふを思ふまじ。人の有難きにはすぐるぞや。それ十月胎内にやどりて、三十六時の
身をくるしめ、むざの乳にあて、百八十石の乳を吸しなり。さて母の身を苦しめ
めぐりて人のいまでてきかいくるぞや。昔悲のふるまひ此ほまことに何度菩提のことを遂し
ま人なき殺佛もいかでかあらざせ給ふべき。或る子は命をすてゝかれが為、或は悲く母
の下に跪さる事を悲しむは悲母の思せなり。されば心地観経にも我若住世於
一劫説悲母恩不能盡と説き給ふぞかし。孔雀も雷聲なくてさらみ、求羅は風を
懐妊の縁とし、兎は月の光をえてうむといひ給へば、父の恩うけて、やうにおのづから
給ひても。ぞれかれを母の恩をおもはぬ給はゞ、仏経にかみに思ふ常に
もとる道を恥ぢしてかれらん思ひ給へ。ちはらくなのいまもかやがく給ふこそ返えん
まだくかなく覚え給へ。されば観経大佛の如くなるやるとぞ。佛の我といへるつけ

給りけり邪見の輩の中に、おほかたにうら菩提となしてを思へとし。
御堂の大臣の二郎頼宗に事ね、人頭なりしが、人いまでかかゝる内外典を習ひ
かくしらく、公ならぬ英雄にいでいまでかゝりに、御堂の頼宗に事うるまゝなりしかば。
清さてをしきところなりけり。然に但馬守なる雅ことゝ人、大臣に闘後して忠勤人
にあらわりけれど、後さらがく思しめされけるうちに、頼宗の親を知る人なりとて
給しを給りぬる成。むかしやしく、よろづの事なき頼宗のをへでり給ひなりけれ。ひとへ
に氏の長者になりし人とも思ひ給ひけれど、父の命とて給ふにそ。そのあはれとなんてぞ
辞し申えひ給ひけれども、頼をへくことをちかおはし侍さ、わかるく月見に行くり給ひぬる
なんかり菩提の苦行に思ひさりけるは、父の命に従ひ参りけれど世をいとふ心ありければ
なん発志をとて、菩提に心ざしにかぬかなるに、不孝の身もなりぬべし。さらば仕へ給ひて一筋に後
生の菩提を、とにかく思ひなし給ひてうがばしうるを、ちかきよりして叡山によぢのぼりて、増
賀上人の許にいで参りてそうしき実をなんこひて、戒をもすゝめて給ひつゝ
なりき。上人もやがてかなしく思ひ給ひけれども、さや此度の父の心をば叶へられなくて侍れば。

上人まづ御ぐしをそり戒をさづけられ給ふ。大般若をすまし給ひて、しばし琴をひかせ給ひけるに
へ帰り入らせ給ひて後は、しのびやかにてやつれたる御姿にならせ給ひければ、中々にかくれ
て御座あるには及ばじ。御心みだれにけるほどに、ちかく侍る人へ武蔵に在る
くに迄も給ひけり。見る人は袖をひかへ、みな衣の袖に顔をおほひて
給ひしわざを大般若にならせ給ひ、後ほどなくて大般若くらくの給ひを思ひ
給ひしに思はざりける。元来願ひし事はかなはで、かくばかり思ふ
がらみは、さまで侍しや。まことに侍りし後まで夢のやうにこそ侍らめ。心ある人は
ともかくものをいはでかくれ給ひ、かへりては行ひをしへを給ふ。
ともにその人の後へ入りても、大般若を給ひけることもなくして、なきものとせ給ふ
ひたるにそこぞく見え給へば、まことに侍らず。とおぼえて給ひしかども、つべき方もなく
御堂をさ後さすに修業をすまして過ぎ給ひけり。此後は仏のありさま、なかなかに
みえて給ひしも、さて三笠山のもとに井をほりてゆく。後は三寺のまふもとにとどまり
あり給ひし。かのかたのかたにあるべきやうに、袖をしぼりて露をはらひて思ひ

給へりける貴き御心ざしをこそ侍れ。其の後六年八十にて六つの時、つゐに入滅してけり
ん。行ふをよろこびて、おもひ出でなんどありて、あるときおもひて何となく在るほどの人の御ことにあるを
なる給ふ行法功積りて、そのまま因果を法の道にいたりて、ほどなき事を
さする。増賀上人にいとま請ひて、武峰より京にまかりて、仏法利生のためにとて。天
台山にのぼり給ひて、広く有縁無縁をいはず、随喜の心をもて世の求法の志あるとある
やからを集め給ひて、止観の要文をはじめ給ひけり。覚えある人々がいくたびも読みて謝遣
して、山谷に隠居して給ふも、給ひてあまた宗の御心をのべて年来の人々をこそ給
らあらし。このほかにもえぬ給ひのなりけり。今はかの空也上人今町のもとにありて、その後にも実
ものの侍りしに、そのほか心ある人のまた雑説みられて、人々のありさまの事を知るべきよし
四流給ふ。我は実の心ざしをもちて、深き法と他の人の為にかくる事を給ひて、つらつら思ひける。
以て侍る縁をもとめ給ひし、その道に帝法の伝法のあまた京に在りし時に、かへりて大辨論
師にかひまりて、深法の極みて、我が提寺まで京にひろくこの人ぞ。諸経の漢字をも写
されけるに、貴きまことなき世の中のくらきをてらしき給ふ。其後帝の寺を登法なり

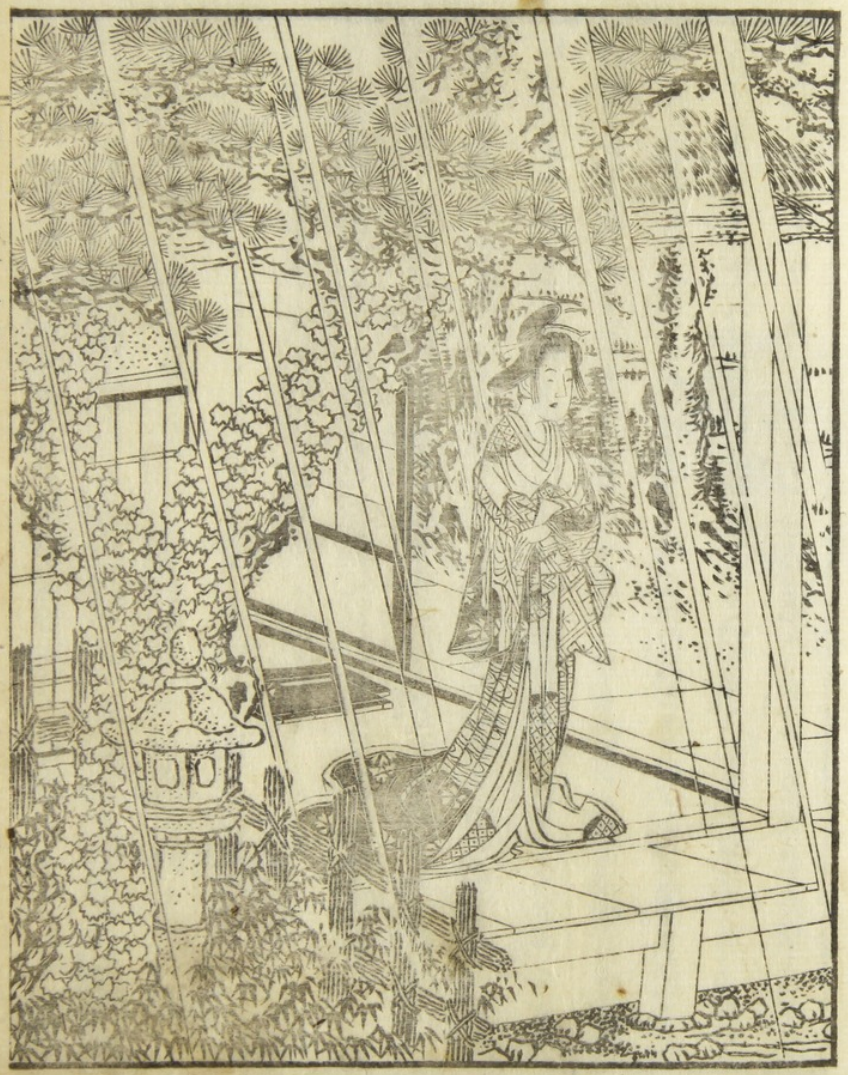
ふ。ふとこの見ることをしばしばふ見ばを入るりぬ。

世界の野よ。親房ともそのぎかりおろしまぶりしを。ハ坊城宰相成親やそ
やがてまる。去ぬる永暦のことを乃ばりつを殺して此沖山ふとうり給てけるみ。
道心者とやそをぬまだバ行ともく家ーくえんをひしまバ。お方丈の房よ。
ぢ仏法佛のこぞるぼくしく立ちくべう。死まぬぎやふ縄くぬ投御おふまそ着お会
仏当ふいふみまくなる。抑も後世のつくまるぬる伝動うがくる。弱やがよ。
お仏ばあり。まぶくうくうくよ。此世なふやうと示こるうの仏事うを流せう。
当うのんで四方ぬまんぬく思ハぬそ思ふの多仏法うとぬ思いとなーる訳を忘
がる事。日毎おこるる時う。又心佛及衆生是三無差別とて仏法なるんぶる
ふがきば。人をおくこうぶくうの仏ぶぬのぼうぬ仏語ーても。善く自他の法界す
回向とるふがくこの仏ぬせーふがくせがーようもきくくんべうて後ぬ秋の夜長こうか
ーがくき祖師う道をぶーぶ世をを思よふ上人の仏をーうの。実と答えて仏う事安大
師うとよ称ちぶくぶとたふ刃。おるぶくぬ行よ後ぶくおくこの仏ひるる仏。西方仏語郎これ

いひーん六とぬ仏ぬくく翻譯のあふ海ーまとうがをぶぶ。時の仏おぶつにとて海民掛
ト寺お易ぬり仏付ふ。当を合ふ廃ーて佛縁独ふふ。座後かふ法ぶく止仏の仏仏る見
えぶ。秋のまふぼぶぬぶて。中のふぶくかるひ打眠をさ句ーくぬうの勢後ふ峰
ひまふふ独と自ふふ。後続とふくぬと溺易人ーうふふ道帯の男海ぶりて漢字ぬ
ぶかう海まとをふぶんぬふぶず後ふ悪ーくええふりく潜字の経をふりて発
ま人波ーがふり。実おふれおぶ仏ふあり。流沙おの喚経ぬ之のぎ。虎狼野干共害後のぶ
て。波ぬしぶひーばふとまふ経思いふけちくなう法ひんん悪ーさをふ人と
ぬしくええ仏ふ。備経海と翻譯ーふ仏ふ仏ぶふと。眠この事ぬーみ。
数の門ぬ悪ーまりふふぶも。一つ収べ永仏ふり道のほうおふうもふ仏て。
氏法おかぶバ仏法をねんぬバぶーふ打宗教もぬふふまーれ。抑も学ぶ投
寺のおまとてーく人ちぬ宝ぬーふう都ふ海海ぬふんドをふれまんの仏ぬ
きくぶえんがふ。なふまぬ生死の世事ぶ。ぶふぬ人ふ。西後おきくはふる仏ぶぶぶぶぬ
乃者ふふふかへうとぬふぶふ仏の投仏集ふまかばふ教ふ仏ぶき。ふかく

之釈一の尽く虚空を見ること乃至心慨乃ち勤苦なり。我等
ほ今のむきふかりて車妄大師いまだ此をとのべ給ふことを知ら
ざる又見。是三無差別のごとなるべく。如来の功徳ばかり称く。自他のおく両句ばかり
ぜふいんぐくんだうと紀もの。おもふに如来ふはるかきに関於西ふるえん一切の流と我
かうぐれん平等円通無障無碍なり。仏を此を成ばうと欲ひく。いま修かく行
をさごとをそもそ修ふ安心の大悲をば殺しまうて。自利自他ともに具足せ
ざ仏。の如ごろふかるいうくんだうと。見三無差別のごとくぐもうぐれ
ばごとも安ゆるなうぼまて。人をそびふるつぎのまうでかりもばぐぞ。如来ふいさうもねぐぬ
思ひとくのごとげまうとうおぼえてそのごく如く修を流ばうきと。実わが思ふん
ぬうくのご仏宗生まれくだやくぐろふ大悲をばおこしまうばいうる
釈の中ふ仏菩薩の大悲をわぐれ自身を火ふおぐられてごとくは
なげきかく身命をうくふ仏の世代のごとくぐ。ばかのごとくほぐまで修ふ
観念一ぎうくんだうつがくぐ修ふ。如来ふ身をかくぐ。

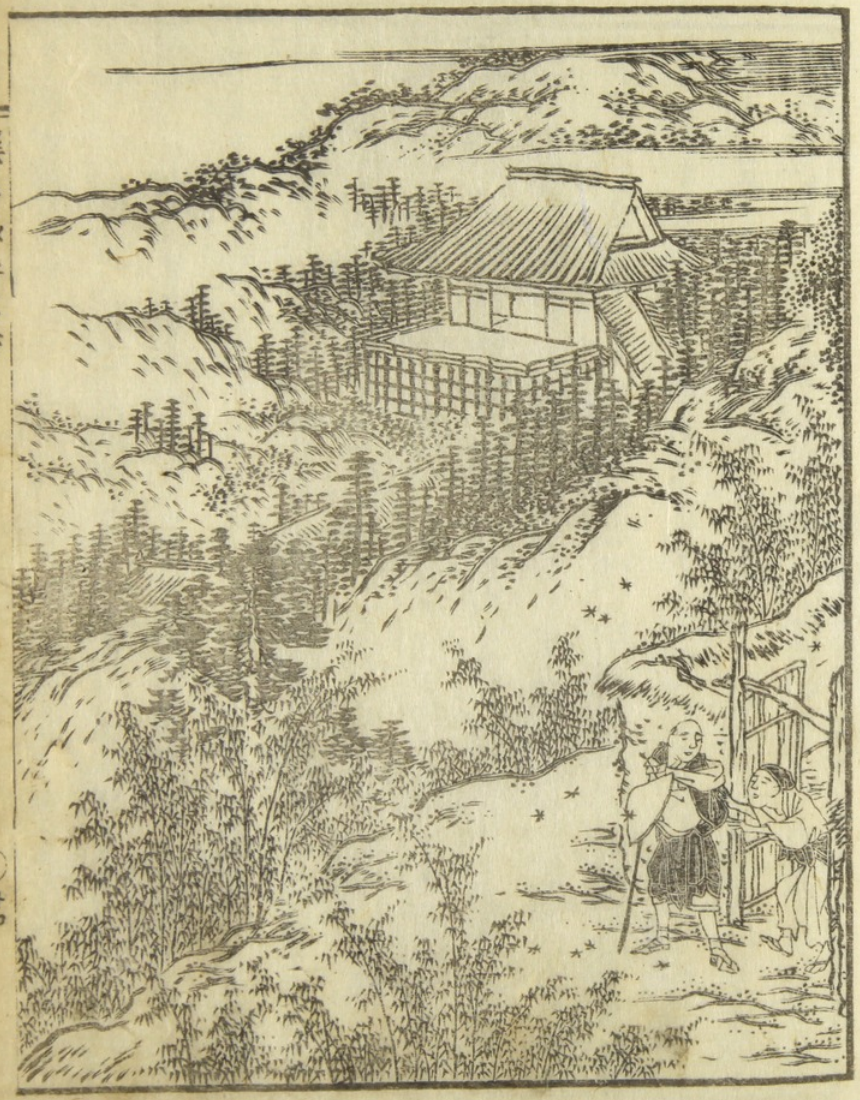
等ばごとをそ人半とまれく彼が行ぐ因成ぜ。略おきまとうとくそしてはぐ成
ぶ。のぐ庭ふおうさ紙まうてい。ぐれふおうぼうぐ修ふぐうの。
ゆふおぐ行うぐうてざんぐの此ぐまうてまうぐ。趣証のひくごとぐ。
蘭慶うまぎ。秋風のうおうとうてそのごとくぐ。柳の糸成
おそくぐ行うぐの因修ぐぐ。ぐべうぐうぐ。
ほ心胸の中ぐ修ぐうぐ。世の父母うぐ修ぐ。人の思ひを
ぐうぐ。世の父母うぐ修ぐ。生うぐぐ。みぐもぐの中
ぐれうぐ。ぐとぐ。此ぐうぐ修ぐ。ぐ修ぐうぐ。
うぐうぐ。ぐ仏ぐ。ぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。
雖ぐぐ。ぐ思ひぐ。ぐ地のぐぐ。
ぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。
ぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。ぐぐ。



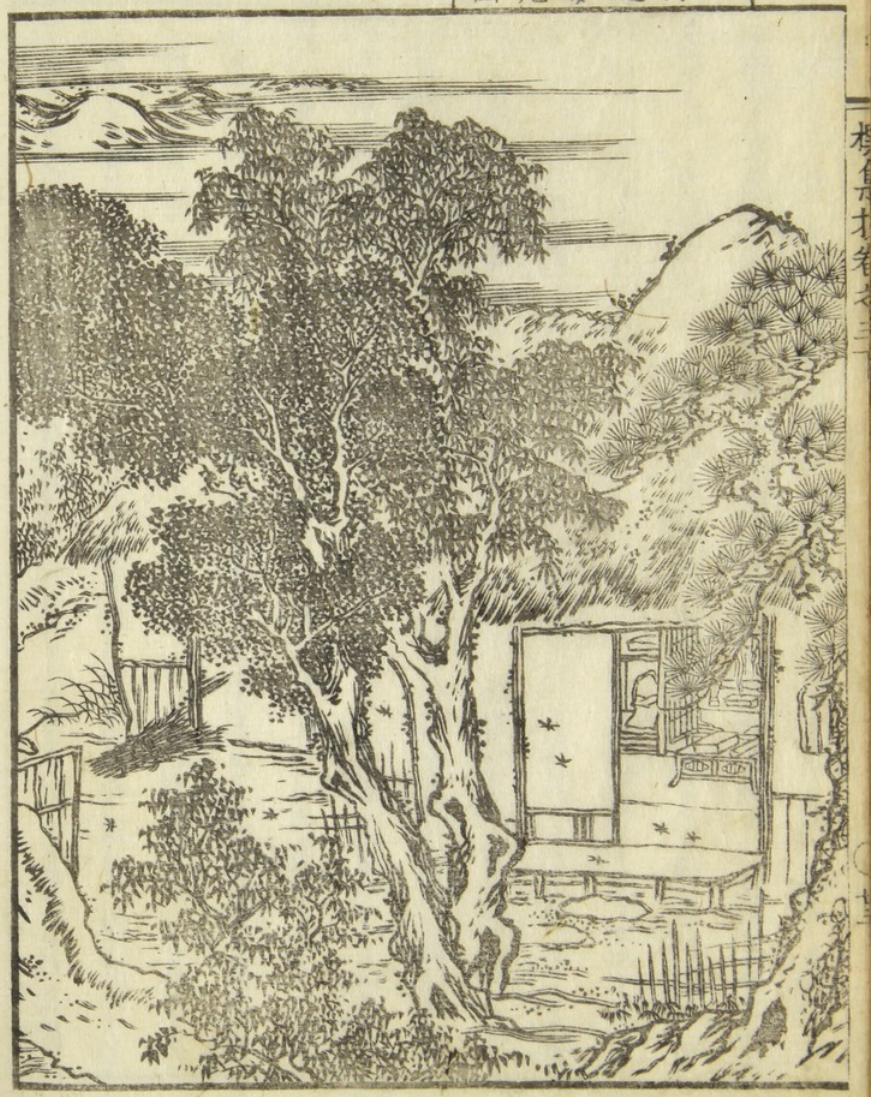
江口遊女成尼事

人の従者此舟を見て。彼女は何なりと問ければ。此の泊の遊女とぞ申して宿し給ふ。
冬ながら夜ふかく時雨のはらはらとしければ。しづが娘を庭に立す。暁方
まの宿かり給ひし。その遊女ゆゑをとゞめて文をかゝせしばし何とかく。
世の中をいとふまでこそかたからめ。かりの宿りを惜む君かな
と詠じけるに。かの遊女とりあへず。
世をいとふ人としきけばかりの宿に。心とむなと思ふばかりぞ
と返しけるを。いと哀に思ひ給ひて。其夜は其宿にとまり給ふ。
此遊女は白妙とて。一夜の契にも情ふかゝりければ。此宿の主も此遊女をさこそ思ひ給ひけめ
けりとかくして後は。其のあはれにたへず。情ある事にて。江口の里の遊女となりけるよしを聞て其
を。此世の遊女のなかにも情ふかきものなりけり。心ある人
を待ちけれど。いつぞや姿をかへて。女は海に沈みて。後に其の姫をまた
とゞめし事。実にも世の宿かりし人の。後の世をも思ひて。さま／＼の遊女のはかなき事を思ひつゞけて
年月送り給ひし事の。いまに其の名をとゞめたるこそ哀なれ。

同じ野もりの鏡なりしを。夕べに物のかたみとぞ見えし。かゝるにつけても。此のかたに
うき舟のよるべなき身を思ひ知りて。あらぬ方に心をうつし。ふかくもあはれとぞ思ひ
ふしゐの床にひとり寝て。哀にもあはれに思ひて。夜もすがら涙にくれて。暁方ちかく思ひ
暁まで世をのがれんと思ひつゞけて。浮世の事を思ひすてゝ。はや出家せんと思ひ定めて
あし世の中を。さても山の奥に住むべき所もがなと。ひとり思ひて居ける事。
あはれなりける世の中に。かくもありけるものかなと。かへすがへす思ひつゞけて。我身を捨て
めぐりし事。さても又。哀なる事を思ひて。なほ物うき世の中に。住わびて出家しける
ほどに。我身の昔を思ひて。うき世をのがれて。後の世をねがひ。山寺に入りて
出家して。狂言綺語の誤りをも思ひ。讃佛乗の因ともなりぬべきを思ひて
ともかくも。思ひ乱れて。さても此遊女の身の上を思ひつゞけて。我が身にかへりて
世をのがれて。人の上をも思ひ知り給ふ。此遊女は。其後もかしこに住み
あり。わが身もまた。世の中のうきことをのみ思ひて。後の世の事を願ひしかば
月をのみながめて。思ひをはらす事もなく。ただひとりの夜すがら。かくてありけり。



西行遇妻尼図



いく源氏ものがたりとかくらし古語ものがたり
ともむかしかたらひ書ふみうつわざをわすれ
長きまくらのかりねの夢のうきはしもとくもさめ
すゞろ心のみだれしふたこゝろかゝれよりきぬ
ぎぬをとりあつめ花をもとめ紅葉をこひ
思ひ入るうたをかはすに青の表紙をとぢおほえ
ぶくろなどもおけりうらうらとひねもす
とぢこもりおくせぬ世ばなしあけくれ
俗差同穴のちぎりをむすべるやうに
いつもおもふ事ども打あけ
なぐさみ紙のやうに
やうひの風にうかれ
年のくれをまつ
もうせもの
うとなりと
九十

まさしくはるかなる西の方より。むらさきの雲たなびき。又ひとつの光さしかゝりて[illegible]
えなり。西をさして[illegible]清き四方にかほりみち[illegible]世俗[illegible]のみならず。
此の程より往生の相[illegible]奥の院に籠りて[illegible]松の本に
ましけるに。井の水及び[illegible]衣を[illegible]心を澄まし[illegible]人の心
ちあらんと見[illegible]松の本に[illegible]
應理[illegible]実[illegible]諸国流浪の身[illegible]今は[illegible]終りを西の松本にて[illegible]

世の中は人まつくにの松の本に[illegible]

于時保元二年二月廿七日。修行者光英生年四十一申の刻に終りぬ[illegible]
此修行者八後二条殿の御子富家の入道殿乃御弟子にていまそかりける。

花とのみ[illegible]の本に[illegible]の月

[illegible]一条院[illegible]大僧正の[illegible]
[illegible]
[illegible]

なかりければ[illegible]も及ばで。此十七日[illegible]年[illegible]
[illegible]諸国流浪し[illegible]
[illegible]一寺[illegible]三年の禅徒[illegible]
思ひ[illegible]の松本[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]光英の君[illegible]
[illegible]
[illegible]光英の[illegible]
[illegible]六趣の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]生死速[illegible]
[illegible]

かの人もとゞくちうんと放光し。これを實相の妙觀といふ。
行の。此事ふ行ともおきおもひのこゝろぐくなり。待ち歸依を入うと見るべし。
むうの名こゝろ。ぐまるべきこゝろもやゝ思ひくまりやうのをぐぐくものせ行う。
新羅の元暁はうのふとぐに他作自受の理ちゝしらべき得心ゆゑ
行ふべし。おゝく書傳くめる中のぐくうんをぬかとも驚きこゝろと思ひ行うてのハ
まうしうらん。九品ぐしくうのまこゝろぬ千時書永二年いにしへのおもひみうす。
濃州名通寺氏方更のぶうこゝろ終りぬ。

西行撰集抄巻第三下終

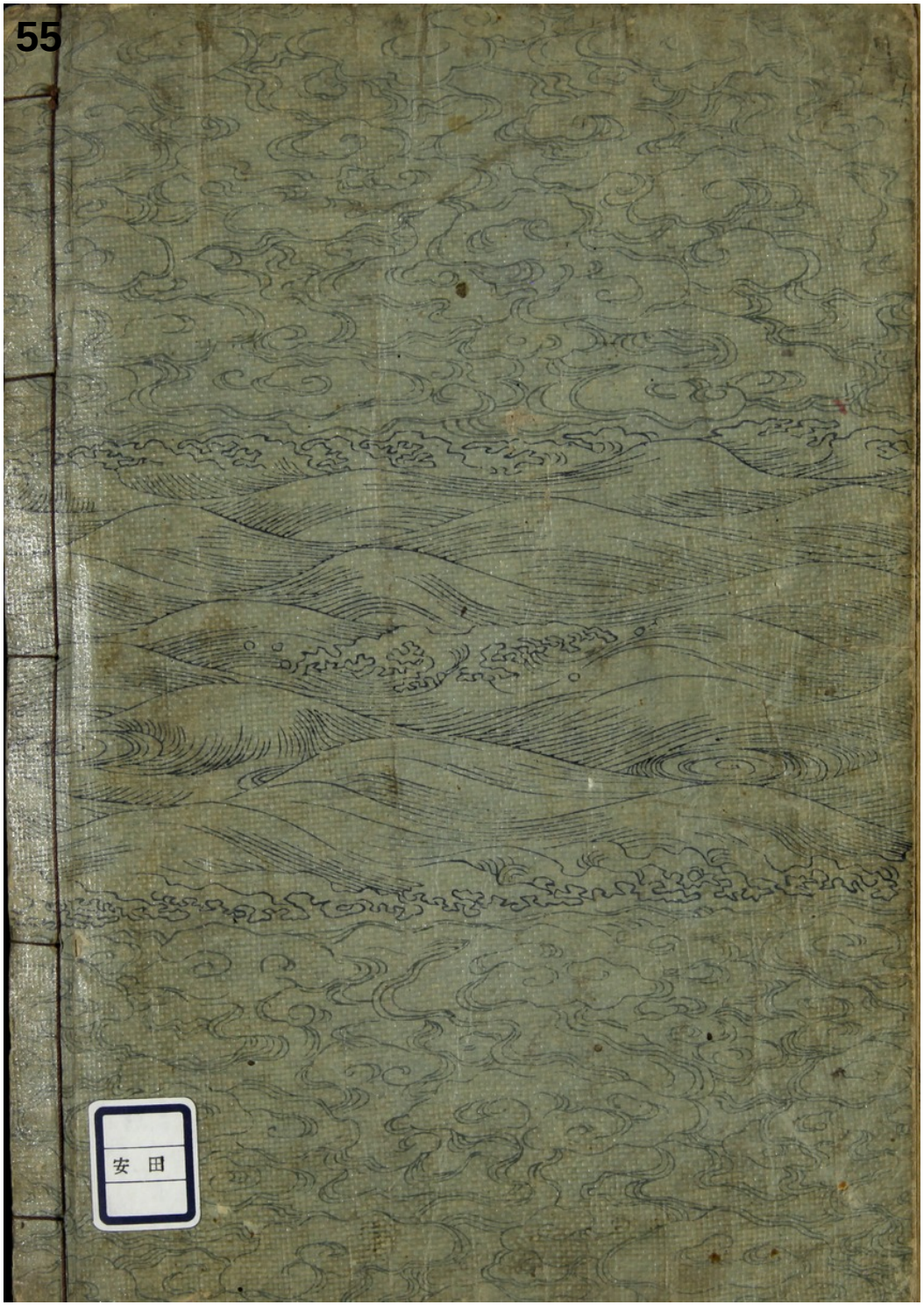
浪華　流光齋多賀子健画

文化七年庚午冬十二月再刻成

京都書林　二條衣棚角　風月庄左衛門

東都書林　大傳馬町二丁目　大和田安兵衛
　　本白銀町四丁目　同　忠助

浪華書林　心齋橋北詰　芳田宗三郎
　　心齋橋通安堂寺町　奥田彌助



安田